

無から、曲がりくねった道、進んでもまたもどつてしまうような廊下より先に在った教室のドアは手をかけられると、その輪郭が描きだされた。白い壁にとけあっていたドアが切り離されるように細く輪郭が描かれて、それはそのわたしの手によって開かれた。

「おはよう！」「おはよー！」と呼びかけあって、わたしとそれは挨拶をして、おたがいをみとめた。教室のまんなかの布団にあなたはつつぶして、「ちよつとあなた、おきて！」「一限だよ！ はじまるよ！」と、わたしとそれはあなたを起こした。教室はもう寢室じゃなかった。ゆすると、あなたは布団からたちあがった。「あ、わたし、おはよう」そういつてあなたはあらわれた。わたしたちはようやくこの教室にいたのであって、ドアはもう遠く、教室には棚や、窓や、植木や、時間割りなどの掲示物、そしてわたしたちもたがいに等しい遠さと等しい近さをもつて分離されていた。教室では時間が空間と交換されていく。それはわたしも、あなたも、それもおなじだった。塩原が窓のそとにひろびろとひろがっていた。そのごく浅い湖面と空とはうつしあっていて、あいだに障害物が建つてはいなかった。何も無いね、とそれは言った。「何？」「何も……」「何が無い？」「何も……」「何がさ？ はじまるって」とあなたは訊いて、「何が、はじまりが、だよ」とわたしが付けた。

「ちよつと、それ、靴ぬいでないじゃん」と言つて、あなたがその足元を指した。指されたその足は外履きのままで、それは校則に反していた。「それさ、いつも外履きのままで教室きてるよね」「こうしたら間違えないしー！」とそれは口を尖らせるかっこうをしながら、靴を脱いだ。もう靴に言及する必要はこれ以降なかった。「あなた、眼鏡かえた？」「そう？」「新しいやつだね」「そ、ものの輪郭がぼやけてさあ」あなたはフレームレスのそれをかかげて、ガラスごしにそれを見た。そのままその顔にガラスをおしつけた。それはそれをふりはらつてからわたしのほうへ向きなおった。「ね、わたし、わたしにも他にも新しいところ見つけてよ」わたしは面食らつて、じつとどこに立つて見るべきか悩んだ。「あ、それさ、髪巻いた？」「そー！ ちよつとシルエット変わったでしょ」「お返しにわたしの見つけてよ」そういつてわたしとあなたとそれはおたがいを指しつづける。明日服を交換する約束をしたけれど——塩原のまんなかで約束なんて……。雨季さえすぎれば塩の砂漠になつてしまうのだけれど、雨季はいつこうにつづいて、わたしたちを島のようにしていた。

「あー！ 時計をみると——時計はあつた——その針は白い盤の上方に指していた。「宿題もつてきた？」「何？」「あの、わたしの一生について、つてあれ」作文！ 忘れてた！」「わたしさ、演劇部なんだから作文とか得意だよね」「たしかにー！」それがレポート用紙の束を持ちだして、わたしはおどけて教室の机のあいだをぬつて逃げ始めた。「いや、あなたのかそれのか、代わりに書いたりとか、しないから。わたしはわたし以外書けないから」「いいよ、わたし、書けるつて、脚本とか担当でしょ？」「そうなつてるんだから！」「わたしが脚本で書くのつて全部、わたしみたいなの」わたしが息切れをして走るのをやめると、あなたとそれも止まった。「水いる？」とあなたが差し出したそれをわたしはひと口飲んだ。「あの学園祭の劇の、なんだっけ」「そうそう、滯なんとか」「滯子？

それを書き留める役割が演劇部のわたしに決まったのは、先週の月曜日だった。それを書き留めることもまた同様に決まっていた。「ねえ、それさ、できあがったら見せてよ」「もちろん!」「わたしたちの名前は?」「わたしはわたし、あなたはあなた、それはそれ、そのままでいくよ」「そのままって退屈じゃない?」「じゃあ、入れ替える?」「わたしはあなた、あなたはそれ、それはわたし」「それもじゅうぶん退屈だと思っけど……」わたしはそれができあがったら、教室の壁に張り出すつもりでいた。無料で見せられるものは、無料で見せなければならぬ。それを張り出すときには、棚や、窓や、植木や、時間割りや、わたしたちと、等分に配置してしまうような気がしたからだった。

塩原は美術館のように静寂だった。それはもともと観光客が絶えなかったらしく、だれもが探しているものが確実にあった。水は電気より鮮明だった。窓はいかんせん貧しかったが、それはわたしたちのせいなのだった。「ねえ、死ぬときのことさ、考えたことある?」「あるよー」「わたしもある」死ぬことを考えるのはあまりに簡単で、たとえば教室の床に寝ている自分の身体を見下ろしていた。「ねえそれってさ、どのくらい離れて見てる?」「身長くらいかなあ」「腕くらいかも」「それがたぶん、お葬式の際に、遺影を棺桶からのくらい離しておくか、ってことになるんだよ」つまりわたしたちに時間はなかったのだ。その時間のなさばかりがわたしたちの時間になるため、ここでは往復できる空間の話のほうか、こう書いていいならば、致命的だった。「ねえ、死ぬこと考えたことある?」「それはないかなあ」「母さんや父さんに申し訳ないなあ」「わたし、あなたの親御さんって会ったことないかも」「ないっけ」「ないない」たしかに、お互いの親類に会ったことのあるわたしたちはなかった。わたしたちの教室にはきちんとした名簿がどこかにあったはずで、おたがいの家の名前は、記憶のなかでおぼろげになっていた。わたしたちは名前で呼び合うんだ。「ないない」教室はそれごと冷え切っていた。窓が開いたままだったので、あなたは立ち上がってそれを閉めに行った。そのとき、それとわたしはそのとき窓の近くにいたので、どきっとした。「閉じちゃだめだよ」「なんでさ?」「いま、せつかくちようと良く開けてるんだから」十五センチほどのその間隙にあなたは指をかけていたが、それがそう言うのを聴いて話した。「ほんとうに?」「そう、十五センチくらいないのがないの」わたしたちにとってちょうどいいのは十五センチの足りなさで、それが足りないぶん、わたしたちは塩原から隔てられているのだ。こちらに振り向いたあなたの顔は逆光で、その暗がりのようなものがあるあなただとよくわたしたちは知っていた。教室はもっと暗いほうがいいと思ってわたしは立ち上がって、ドアの横にあるスイッチのほうへ向かっていった。それにさわると、すこし暗くなる。ふたつの極限がこの教室にあって、そのあいだのへだたりを埋め尽くしているのは、稠密していたそれらだった。すべてが、すべてではないようになっているのであって、端から数えるように教室の床の、四枚の長方形があつまってひとつの正方形の単位になった、条理の床を歩きながら、ひとつとばしてかぞえはじめても、ほんとうに等間隔で歩いているのかわからなくなってしまった。この教室は等しさのなさで満たされているので、ひとつひとつが等しかった。すべてを等しくしてはいけない。「ねえねえ、この教室の縦ってさ、ちょうど八メートルの長方形なのかなー?」広さがあるなんて、考えたこともなかったし、それから先も考えることはないと思

すべてを読みきる必要はない。いずれにせよすべてではないのだから、どこで切り上げようと、その意味のなさは同じで、一時限は五〇分だった。休み時間が一〇分だったので、それは計算のしやすさの都合でしかないのかもしれないなかったけれど、その合計が六〇分であることにも、一時間であることにも意味はなかった。早退するときに時計を見て時間をはかったことなんてなかった。「あと三〇秒下さい」って言われたときのほうがそれにとってそれが惰性じゃなくて、それならば、はなから「あと五〇分下さい」と言ってくれたなら、退屈じゃないかもしれないなかった。映画館であまりに自由すぎたので、わたしはその映画のはなしの三日もあるなかで二日目の部分でいちど寝てしまった。

「ごめん、あと五分待つて！」わたしはまだ机に向かって文を書いていた。「それも書くの？」「え？」「いま、わたしが言ったさ、『ごめんあと五分待つて』、っていうせりふ」「うん、せりふもちゃんと書くよ」わたしはわたしのせりふを鍵かっことで囲って示して、次にあなたのせりふを鍵かっことで囲って示して、あなたのせりふに引用されているわたしのせりふを、二重の鍵かっことで囲って示した。二重の鍵かっこというけれど実際には白抜きの鍵かっことで、それはそれを見て、「ねえこの二重鍵かっことでさ、部屋みたいじゃない？」「部屋？」「間取り」「まどりって？」「音だけじゃわからない」「鳥？」「ちがうちがう、ていうかわたしもあなたもバカだなー。間取りっていうのは、あいだに、とるって書くんだよ」「とる？」「とる？」「とる？」とるっていうのは、耳がまた、って書くんだよ」それは紙に書き始めた。間取りという字を書くのかと思ったら、書いたのは大きな白抜きの鍵かっことだった。大きく書くと、それは角がけずれた長方形みだった。「長方形ってなんだか丸みたいだよ」間取りっていうのはさ、こう、部屋を上から見たやつだよ」「あ、引っ越しのときに見るやつ？」「そう」「家具を買うときにも見るね」「でも結局肉眼で見決めてるよね」それは、それが部屋の見取り図のようだと言いたいらしく、「ねえ美術部じゃん、描いて描いてよー」とあなたにペンをわたした。「鉛筆はないの？」「ないない」「消せないじゃん」「上から濃く描けばいいじゃない」あなたは鉛筆でぐりぐりと間取りを書き始めた。「あなたの描いた絵、見たことないや」「間取りも絵？」「間取りも絵みたいなものだね」とあなたは鉛筆をうごかして、みるみる部屋をなかに描いていく。「ねえどんなふうに描いているの？」「え、こんなふうにだけど」「そうじゃなくて、本物もないのにどんなふうに描いてるの？」「そりゃー、こう、中に入ったように想像して描いてるんだよ、ね、あなた」あなたはうーんといちど困ったように唸ってから、「想像するときにはもう遅いんだよ」とだけつぶやいて、でもそれはあまり意味がわからなかった。「ねえねえ、どんな部屋？」とわたしが訊くと、「そうだなあ、わたしの作品の展覧会」「えー！あなた、展覧会開いちゃうの？」「いつかさ、作品を並べて、人に見せるんだ」「いつか開いたら呼んでよ！」そういうとあなたは静かにはにかんだけれど、塩原のまんなかで約束なんて。「え、ていうか、わたしもそれも一緒にやろうよ」「わたしたちも？」「そ、わたしたちでいっしょに展覧会するの？」「そんなの無理無理……」ほら、とあなたがふざけてわたしに鉛筆をわたすと、わたしは照れくさくてそのあなたの描いた部屋の外に、カモメみたいに鳥を描いた。「これ、マドリ……」そう言うとなおさら照れ臭かったが、ちょうど窓の向こう側に鳥が一羽、塩原の水面に映って二羽飛び去っていった。それにまだ名前などな



らあふる……らあふる……という音が鳴り響いて、どうにもぐっすり眠ってしまっていた——ようだった。眠りはいつも、眠っていたようだと推測するしかないのに、しかし眠っていたと言ってしまった。眠って居た。わたしはほんとうに居たのだろうか、という疑問がわくけれど、そんな、疑問文など許されない。肯定文ばかりが生きた花なのだった。「おんなじ天井だ」わたしたちは布団からばらばらとたちあがった。わたしとあなたとそれのおいが混ざって、つめたく滞っていた。そうだ、めいっばい運動してから、お昼をお腹いっぱい食べて、それで寝てしまったのだった、わたしたちは思い出して、おたがいに確認しあって、そうだねそうだねと言いつつ。わたしもあなたもそれも、おんなじ記憶を持っていたのであって、つまり教室は寝室だった。「あなた」「それ」「わたし」呼びかけあって目を覚まして、わたしはわたしに、あなたはあなたに、それはそれになった、ほとんど透明な世界に、目をこすりながら指さして、「黒板」「こくぼーん」「こくぼんだ」「窓！」「窓」「つくえ」「机！」「机」「椅子」「椅子」「時間割り」「時間割り」「時間割り」「黒板消し」「こくぼーん消し」「黒板消し」「猫」「ねこー」「いや、猫いないから」「猫いないね」「猫いないかー」あなたは黒板に、チョークで猫の絵をざらざらと描き始めた。それはあんまり上手いものだから、黒板自体と見分けがつかなかった「わたしさ、昔猫飼ってたんだよねえ」「へー」「初めて聞いた」「初めて言ったからね」「名前は？」あなたはううん、と一瞬考えてから、「ねえ」「何？」「いや、ねえ」「え？」「ねえ、つて名前」「名前？」「だから、ねえ、つて名前だよ」「なにそれ」「猫のネ？」「ネは猫のネ！」「そうそう、猫だからねえちゃん」「姉ちゃん？」「いや、そうじゃなくて」あなたは思わず笑い始めた。「ねえ、ねえ、つて呼んでた」猫はインターネットの中心だから、三毛猫に雄は見当たらなかった。

ねえと喚ぶ声す白墨の仔猫かな

国語は俳句だった。たしか、五音や七音そのものに意味があるのではなくて、わたしたちが五音や七音でよむことに意味があった。「ちゃんと切れるねー、あなた」「でしよ、キレキレでしょ」「そうじゃなくて……」それは笑いながら、鉛筆でスラッシュを引いた。

ねえと喚ぶ声す／白墨の仔猫かな／

「意味が切れるところが必要なんだー」とそれは笑いながら言う。「どうしてさ？」「次に何が来るかはわからないからだよ。わからないとき、それはあなたのじゃないんだ。ねえと喚ぶ声す夏雲の塩原」「ねえと喚ぶ声す繭よりおのおのに」「ねえと喚ぶ声す彼岸のうわごとか」「あれ？　そういえば季語って……」そう言っただけは口を噤んだ。そうだ、季語なんて滅んだんだ。「ねえと喚ぶ声すピエール・メナール忌」あんまり突然チャイムが鳴ったので、わたしとそれとあなたは驚いて、ラーフルで黒板の猫を大急ぎで消して、ドアに手をかけた。なにかおそろしいことをしてしまった気がした。そのまま灯りを消して、教室を出ようとしたとき、ふと、そのなかの晦渋な闇へ、呼びかけられたように振り

意味がわからないならば、それはやめる時機ということじゃないかなあ、という科白で、とりあえず第一部の上演が終わった。じつによくできた演劇で、まるで現実の出来事のようだった。「すごいよー、わたし！」それに褒められてわたしははにかんだ。「演劇部の本気って感じ。でも、自分が自分の役になつてると思うと、ちょっと照れるような……なんだか、自分が自分じゃないみたいだった」「自分の役なのには？」「そうだけどね」わたしとそれとあなたは笑って、脚本をもう一度見返して、重要なところや、省いたほうがいいところを線をひいた。「自分が自分だったみたい？」脚本のなかでわたしたちはその名のもとで、ばらばらに、しかしその名のもとで描写されていた、わたしたちは『刻まれ』であり、より詩的でない表記をするなら、文献だった。すべての書物のすべての頁には、見えないインクで物語が刷つてある。

「猫になりたい」「え？」「いや、猫っていいなあと思つて。猫耳とかつけてさ、」「それつてお約束だよね、わたしらみたいなのには」「あるある」「あるーある」「そう、わたしたちつて生まれた瞬間から猫耳つけてるからさ、いつそ猫になつてみたいなと思つて」「もうなつてるよ」わたしとあなたとそれは布団の上で猫でいて、教室はじっくりと。爪で布団のシーツをひつかいて文字を書こうとしたが——いや、書こうとしたそれは文字であつたかもしれないが——しかしできあがつたのは、書こうとしたそれには似ても似つかない、書かれあがつたそれであり、わたしとあなたとそれがそれぞれにそれを書き重ねて、それはなにがなんだかわからない痕跡になり、シーツの弾力によりすこしずつ消えていった。それはするどく美しかった。わたしたちは、どうか誰もが、どうやったら眠れるかを正確に知らなかつたし、またどうしたら起きたのかも正確に知らなかつた。わたしはつねに起きていた。あなたもつねに起きていて、それもつねに起きていた。「ねえ、気絶つてしたことある？」「気絶——？」「寝落ち？」「寝落ちもしたことある？」「わたしあるなあ、ずっと徹夜でレポート仕上げてるさあ、全然書けなくて、一睡もできないまま学校で、朝提出して机について、チャイムが鳴つた瞬間寝ちゃつたの」「あなた、寝過ぎだよね」「寝てたら指されないものね」「寝てたら空気になれるからさあ」「そしたらチャイムが夢のなかで鳴つてさあ、コーン、コーン……。それで起きたの」「え？」「寝たら、鳴つて、起きたの？」「そ、だけど……あれ？」「つまり、寝てないの？」「うーん、寝たはずだけど」わたしたちはつねに起きていた。「どういうこと？」「ともかく、チャイムと一緒に起きて、一緒に寝たんだ」「起きたと同時に寝たの」「うーん、たしかに……」ただしのは誰だったのか、わたしたちの議題はいつもそれだった。あなたはわたしたちの会話のなかであきらかに、覚醒と眠りに引き裂かれていて、つまりそれは「らあふる」と「ぼろおれ」の距離、しかし距離ではなく、引き裂かれた時間や空間はそのまま押し広げられたことで希薄に、透けるようになり、窮極にはそれは遠い無、とおいむ、とおいむ……チャイムはいつもそう響く。あるいは遺影と棺桶とおたがいにメタファーであり、「ねえ、わたし、つづきよろしくね！」フィクションはここまでだ。フィクションはここからだ。この二つの「フィクション」のあいだに横たわる——釣り下がる、「はここまでだ。」これだけがこの世でフィクションではないこの七つの文字だった。「ねえ、そろそろ一時限目、終わりだよ、わたし、起きなさい！」それにべしべしと叩かれてわたしは起きた。とおいむ、とおいむ、

それが訊いた。いつも疑問を持ちだすのはそれだった、「わたしたちの世界に足りないものはないよね」「ないかな?」「世界に足りないもの、つてなに?」「おしまい?」「でも授業に終わりなどない……」そういうながらそれはノートを取り出して広げた。わたしもあなたもそれに倣ってノートを取り出して、わたしはさつそく、その会話をノートに書き留めた。「なにそれ?」「ほら、例の」「あ、あの脚本のやつ?」「そー、上演に向けて書きあげ中」「書きあがり中だね」「そう、でもちょっと言い回しとか直したり、オリジナルで加えたりしていいかな?」「どーぞー」わたしは赤いペンで科白と科白のあいだに「でも、声かもしれない」と書き加えた。わたしたちに耳道はなかったのだから、というか、わたしたちは全身が耳道だった。声は校則であって、それは繰り返されて固着していたが、しかしペンの先が紙を引つ掻くちくちくとした刺激が、わたしと、あなたと、それとを、あまり退屈にしなかった。布団は退屈で、しかしわたしたちの日常は布団の上にはなかった。布団の白さは昼の白さの引用だった。「そういえばさ、この、布団のくんだり、あるじゃない?」あなたはばらばらとページをめくって指さした。

それが布団からたちあがると、椅子にすわっていた。

「この布団はどこいったのさ?」「消えたの?」わたしとあなたとそれがあたりを見渡したが、しかし布団そのものがあることはなく、しかしそのあいだ、布団はあった。「布団があるのはわかるけれど、こう、なんていうかな、ないね」「布団はあるね」「うん、布団が……ある」「から、ない、みたいない」たしかに布団はあったのだが、しかしそこにはなかった。布団は床に根を張っていて、ただし放置や侵食とは関係のない意味で、布団は大地だった。「んにゃー」とそれは「ごしごし」と目をこすって、「布団をはじめ見たのはいつだっけなあ」しかしそんな瞬間など、ありえないのだった。起床は誕生とはけっして違わし、眠りもまた死とはけっして違っていたのであり、わたしたちは布団で生まれたのではなかった。「でも、死ぬときは暈で布団がいいなあ」「たしかにー」「日本人に生まれただけはね」日本人は日本語で話すのだった。「布団で死ぬのが夢」「夢だね」「夢で死ぬのが布団かな」「それだと逆じゃない?」「でも、夢は布団で見えるものだからさあ」「わたし、布団での読み聞かせ、いやだったんだよねえ」「なんで?」「うーん、そうだな……それは必死すぎたんだよ、布団じゃお話しなんか成立しなくて、まるで新聞みたいに」新聞と日記はあまりに似ていた。ではこれは? これは日記ではない。「それって日記、やめちゃったんだっけ」「んー、そうだねー」「書くことがないとか?」「書けることはないんだー。だって、日付けがわからなくなっちゃうから。でも、たしかにあったし、その次もあったんだ。それを並べちゃいけないくて、展望とは折り合いがわるいよ。んにゃー」たしかに、日記は絶対に失敗した。そこまで言うてからそれは、「まー、日記は日記で退屈なんだよね、にゃー」なんて、猫まねでおどけて、簡単な理由に差し替えた。わたしは脚本にどちらを書いただろう、ただし順番を入れ替えて。「日記は狂信で書くんだよ」わたしは三つ目の理由を書き加えた。「ね、わたし、夢オチとかはやめてよね」あなたが半分意地悪めいてそう言ったので、「ないない」と手をふってわたしは否定した。夢落ちはけっ

「はっ、夢か」と口走り、ここまでは夢だから正気ではとらえないでほしい、とそれは前置きしてから、「御茶の仔さいさい」と笑った、しかし、それは「日常茶飯事」の言い間違えで、ともかく、そこに連続性を見るならばそれは狂信だった。狂信ではなく狂気が必要だったのだ。

「ねえ、『存在』ってなんだっけ」「え?」「『存在』だよ」「なに、わたし、突然の哲学?」「existenceでしょ」「あ、そうだ!」わたしは向き直って、ドリルの空欄の頁に書きこんだ。たしかにそこに「存在」が現れたのは突然だった。「existence っていう意味なの?」「existence という言葉の語源は頭の ex が「前に」という意味でそして stence がもともとは「立つ」という意味であり、それは *ecstasy* と同根であった。「エクスタシー?」「エクスタシーって何?」「イグジステンズと同じらしいよ」「え、じゃあイグジステンズって何?」「『存在』でしょ」「ねえ、『存在』ってなんだっけ」わたしもあなたもそれも、存在という言葉が一体何を指すのかわからなかったし、こう言っつてよいならば存在は存在しなかった——と書くことさえままならない——いや、書きえた。こうして、書きえた以上——存在も書く行為も同じ意味なのだ。「えっ、存在って行為なの?」「ううん、どうなんだろう。ものつぼこ」「ものつぼこよね」「being は〜」「being こそ行為つぼくない? あれだよ、習った、動名詞ってやつ」「どーめーし」動名詞は動いているのに時間がないから、たぶんお話しの中の存在だけれど、しかしわたしが書いている脚本もひとつのお話しにちがいはなかった。「being はお話しのなかの存在だよ」「あ、存在って言ったー」「不覚!」あなたは百円玉を机の上の貯金箱に入れた。「ていうか、それも今言ったじゃない」「あっ」それもしぶしぶ加えて入れようとしたが、「今のわたしのはペナルティなの?」「どういう文脈でもよ」「そもそもなんでさ?」それはこのすべてが聖なるなかで唯一聖性を二重に受け取ったものだからであり、しかしほら、唯一ではなく、それは存在のことだった。しかし、存在でしかない存在は言葉にすぎなかった。わたしがしづかに三百円払うと、あなたとそれは不思議がった。「なんで?」「わたしは書いていた。書くということは朗読することなので、つまり黙読するという言葉は語義矛盾をはらんでいて、黙読は存在せず、百円を払った。不在は黙読するしかない言葉だった。「ねえ、エクスタシーってどういう意味?」「間をもたせるような言葉がないような恋人が理想だって言うよね」「たしかにー」「間をつなぐような会話があるとき、長続きしないよね」「長続きって何?」「わたしもあなたもそれもおしゃべり好きだよねえ」「もーひっきりなしにさあ」「でもさ、おしゃべりが尽きないのも恋人みたいだよね、わたしたちって恋人みたい」「誰が彼氏役?」「うーん」「あなた、いいんじゃない? そういうキャラでしょ」「まあね、たしかにわたしってそういうキャラだし」「キャラって何?」「『刻まれ?』」「それは、キャラクターだよ」「character ってどういう意味?」そう言いながら電子辞書を覗き込んだわたしの瞳を見て、それがあつ、と気づいたように言った。「えーわたし、カラコン入れているじゃん?」「あれ?気づかなかった?」わたしの瞳はひとまわり大きく、また茶色だった。「それ、校則違反だよ」「いいーじゃん、このくらい。いまだき校則ちゃんと守ってるのなんていないよ」「まーねー」わたしたちはぴーちくばーちくちくと会話を続ける。「ねえ、わたしたちって女子だよね?」世界は女性か、男性か、という問いが、中間レポートのテーマだった。まだ三百字も書き

わたしとあなたとそれと名が呼ばれる回数をすべて同じにする必要があり、むしろそれが不揃いであることが世界の理由だった。「ねえ、それ、髪切った?」「そー、ばっさりー」「ボブも似合うじゃん」わたしにほめられて、そーおかなー、とそれはへへへと照れた。「でも全然お金ないよー、カットが限界、カラーもパーマもしたーい」「わかる、わたしも今度眼鏡新しくしようかとおもってさ、なんかものの輪郭がぼやけてきて……」「わたしも服がなあ……もうどれも着すぎてて、ルーティーンが」「ルーティーンはルーティーンが大事だからねー」わたしたちはいつも地口を言うときは命を懸けていた。「[Text]なおさから軽くなってしまっからだった。

雨は降り、続いていた。「それにつけても懐の寒さよ……」存在することは経済活動だから、だってここにいるだけで費やしているのだった。「なんか、何に使ったかわからないままに減るんだよねえ」「そう、必要なものにしかお金使ってないのにさ……」「貧乏学生だからね、わたしたちさ」「でも、適度に貧乏なくらいじゃないと、ねー、ルーティーン消費するので精いっぱいにならない? あれ着てないとか、次あの髪型にしてみなきゃとか……」「まあ、サイアク、全裸でいればいいじゃない」「全裸で」「やだよー」わたしたちは笑い転げた。おたがいの裸なんて想像したくてもできなくて、それがなんだか余計にエロティックだったのだ。「でもあなたとか、自分でつくったりしないの?」「それはわたしがやってなかったっけ」「上演のときに作ることもあるよ、部のみんなで合宿して作るんだー」「え、じゃあ今度わたしたちのユニフォームつくろうよ!」それがそういうと、わたしもあなたも二つ返事で同意した。ユニフォーム、という響きもまたよくエロティックだったのだ。前に、裸の身体がたくさん集まって猫の顔になった浮世絵を見たことがあった。「ちよつと、それ、靴ぬいでないじゃん」と言っ、あなたがその足を指した。外履きのまま教室にいるのは校則違反だった。「それさ、いっつも外履きのまんまで教室いるよね」「こーしたら間違わないだもん!」とそれは照れ隠しをしながら、靴を脱いだ。もうこれで靴のことはおしまいだった。「わたしさ、ユニフォーム、靴までつくるの?」「え、靴作れるの?」「まっさらなスニーカー買ってさ、それ塗ろうよ」「たのしそー!」「まっさらなスニーカーなんか、ほんとにあるの?」「どんなスニーカーもはじめはまっさらだったんだよ」「ほんとー?」「演劇部でも靴とかつくったりする?」「作るよ、外のシーンで靴履いてなかったら変じゃん!」「たしかに」「それ着てみんなで遠くいこうよー」「いいね!」「旅行!」「どこ行くの?」「うーん、南の島」「アバウトー」「いわゆる、南の島だよ! こう、アニメとか漫画に出てくるみたいなの、ヤシの木が生えてるやつー」「そんなところ行ってどうするのさ」「寝るんだよー」「寝るんかい」「暑いだろうなあ」「涼しいユニフォームにしよう」「麻がいいね」「一枚の麻、大きな麻から全員の衣装をつくろうと一通り盛り上がって、わたしたちは疲労を思い出した。「次の授業、自習かなあ」「最近自習なかったしね」「それ、関係ないよー」「関係ない?」「最近自習がいくつあろうと、次が自習かどうかは……神のみぞ、知る」「いや、センサーのみぞ知る、っしょ」センサーという字は、小学一年生で習うはずの漢字だったが、しかし、わたしたちにその記憶は、まっさらだった。「どう書くの?」「先週の先に、生理の生だよ」ああ、と言ってわたしは書いた。したがって、次の授業が自習かどうかを知るものはいなかった。数学だけが

半ば出来上がった脚本の一部がなかったたので、わたしが思い出して書きなおすことにした。「どこいったんだろーねえ」「うーん、全然記憶がない」「何が書いてあったかなあ」「いつのがないの?」「一昨日とかかなあ、他の日もあるかも……」「あるの、ないの?」「ないのがあるの」「それは全部そうだよー」そもそもこの脚本を書きだしたのはわたしじゃないのに、わたしが思い出して書くのは難儀なことだった。少なくとも、書くことを思い出すことはできやしないのだから、不可能だと知りながら、わたしは書いていた。「ていうか、埋まらなかつたぶんはスルーで、なかつたことにして、ないことにしてさ、また次の同じ時間に書き起こせばいいんじゃない?」「えー、早く完成させたいじゃん」「完成するの?」わたしたちには時間はなかった。たしかに起こる前では早すぎるので、ともかく書いて決めたほうがよかつたのだ。それは端的に、未来はなかつた。

先生はまだいなかつた。授業は自習だつた、その理由は先生がいなかつたからであろう。「自習なのに教室の外でちゃいけないとか、しんどいなー」「何もないのにね」「ていうか、自習したいが校則違反じゃないのかな」「じゃあ、外出て怒られるなんてないね」「もし、外出たらどうなるかな?」「締め出されて、いなかつたことにされちゃうよ」「校則違反の代償、重すぎ」「話変わるんだけどさ、」「話が変わるのね」「休み時間のことは書かないんだっけ?」「うん、内容薄いし」「だから完成しないんだよー」「それ、わかつてないなー」わたしは、一流の芸術家のように指を左右に振つて、鼻を鳴らして答えた。「脚本は上演が終わるまで完成しないのだ」「おおつ、それっぽい」しかし劇の上演は決して終わらないのであり、すべてはかならず途上だつた。「初演、楽しみだなあ」「どこでやる?」「教室?」「外?」それはあまりに重要な問いで、わたしは考え込んだ。それがそれを覗きこむのを二の腕でぐいぐいと押しつけて、わたしはそれを見ながら待つていた。「この教室のつぶれた跡地でやれたらカッコイーな」「え、教室ぶっこわすの?」「そーじゃなくてー、うーん、ともかく、かつてここに教室ありき、つて言つて始まるんだよ、この脚本は」「そーなのか」「そう、思いを馳せるんだ」それは、あまりにわくわくする書き出しだつた。だつて、それは最初で最後の過去形になるのだから。わたしたちは、過去形の響きがすきだつた。き。き。試しに繰り返してみると、その瞬間に世界がまるで変わつてしまふような響きで、なんどもなんども叫んでみた。「き!」「き!」「き!」それは祈りではなく、あまりに大声だつたので、もしかしたら先生のいるところまで響いていたかもしれないなくて、そうしたら自習は終わりかもしれないなかつた! そうしたら、わたしたちは逃げだすしかなかつただろうし、上履きをほっぽりだしただろう。「たぶんビッグバンは、バーン!じゃなくて、キッ!つて音がしたと思うよ」それは理科の教科書を見なくてもわかることだつた。「ねえ、ミュージカルにしないの?」「うーん、あなたもそれも、音楽部じゃないしなあ」「えー、入れようよー」「うーん、最後の場面とか、歌でしめるのも、ありかも」「やつた!」「でも、誰が作曲するのさ」わたしがそうあきれたように言うと、それは椅子の上にはちあがつて、なんだかジャズだかロックだかオペラだかわからないような、ごちゃごちゃの素人の歌を即興で唄いはじめた。それは決して上手くはなかつたが、とほ

うもなくそのまま、教室の歌だつた。それはそれ自身の声ではないようで、けつしてわたしたちはその恐ろしさに慣れることはなかつた。曲名を聞くと、「誰も寝てはならぬ」

白い——あまりに白いホワイトノイズが世界に通奏していた。

わたしたちにとって理科の教科書はアカシック・レコードで、聖書のようにそれを読んでいた。「わたしたちの体の中の炭素は、こう、いろいろ変化しながらさー、何万年も、何百万年も炭素だったんだよ。それってすごくない？」そうだ、炭素は不死で全知なのだった。「それってさ、炭素だけ？」「炭素だけじゃないけど、でも、銀は嘘をつくんだー」「え、銀の食器ってさ、むしろ毒を見破るために使われたりするんじゃないの？」「それは歴史のカテゴリだよー」「ねえ、わたしたちって炭素でできてるの？」

わたしやあなたやそれを焼いたら何が残るのだろう、と考えたけれど、誰も自分が燃えるようすなんて想像できなかったし、そこには何も残らないどころか、「へへへ。なんちゃってー」なんて言いながら笑っていたり、もしくは、全部夢落ちだったりするように思えてしまった。生まれ直した水子はもう死なないのだったし、当然死刑よりも流刑のほうが、相性が良かったのだ、水なのだから。流刑は身体を知らなかった。「でも、うちらに流刑なんてないんじゃない？」「なんで、流刑は島流しだけど、流しって言うときンクになるじゃん」「たしかにー」あなたは教室の隅のシンクに歩いて行って、水を汲んで飲んだ。さらに二杯汲んで、差し出す。「水いる？」「いるー」わたしとそれはあなたと同じように水を飲んだ。「そういえば、塩原の水ってやっぱしょっぱいのかな？」「当然でしょ」「そりゃあ」「海くらい？」「海よりしょっぱいんじゃない？」「海も塩原くらいの濃度だったら、砂浜に塩が、セキシュツしちゃうってー」「お、さすがリカジョ、それ」「どやー」わたしたちが海の水を飲んだら、わたしたちが島になるのであって、そういえばいつか美術の課外研修で行った美術館に、蟹缶を裏返して、世界を蟹缶の内側にとじこめてしまった作品があった。缶の蓋は、裏返したことがわかるように、開けっ放しで、まるで口みたいだった。それがいたく気に入ったわたしたちの内輪で、口を大きく開けて「宇宙の缶詰！」というギャグをすると、みんなから笑うのだった。「うひゅーのかんうめ」「うひゅーのかんうめ」「ちよつと、お腹痛い、やめてよ、わたし、ちよつと」げほ、げほとあなたは飲んでいた水をせきこんで、「んもー、死ぬかと思つたわー」なんてうそぶいた。「それじゃ死ぬないよ」もう一度あなたは水を汲んで飲んだ。「欲しい時に水が飲めるのが、豊かかってことなんだなあ」「うひゅーのかんうめ」「やめてってばー！」

「ね、キスってしたことある？」「ないなあ」「スキンシップすらー、縁、ないですから！」「いやいや、縁しかないくせにー」「え、なにになにどういうことさ」あなたが、わくわくしたように聞けれど、しかしそれはにやつくばかりで答えようとしなかった。「え、じやあキスシーンとか書いちゃおうかな」「いやいや、やめてよー」「誰が彼氏役？」「うーん」「あなたとか、いいじゃん？　そういうキャラでしょ」「まあね、たしかにわたしってそういうキャラ……って、こちらら」そうだ、不純交遊は校則違反だった。海の満ち引きは、二度とおなじ形をしないで、砂浜にぬれたあとを残して、それはかろうじて、わたしたちの世界の輪郭だった。よく似た心理テストをみたことがあった。わたしたちはひと口ぶんの水を飲んだ、それはおそらく、蟹缶に溜められるのとちょうど同じだけの水で、わたしたちは飲むときにいつも、あの缶詰のように顔をあげていた。「うひゅーのかんうめ」

机に彫刻刀で名前が刻まれている、それはお約束で、校則違反というわけではなかったし、わたしもそれもあなたも、書いたことがあった。「ねえあなたって美術部で彫刻とかもつくるの?」「うん、ときどきつくるよ、木材を部費で買ってさ。でもふだんはわたしは絵ばっかりかなあ……」「知ってる? あなたのサインちょーかつこいいんだよ」とそれがせがむものだから、あなたは水性のマジックで机にサインした。それはもう「あなた」とは読めないけれど、しかしあなたに固有の文字なのだった。「ていうか、あなた、持ち物全部にそれで名前書いてるよね!」「うわ、ちょっと、恥ずかしいって」それがあなたの鞆をひっくりかえすと、たしかにどれにも似たようなマークが書いてあった。筆箱、教科書、弁当箱、水筒、クリアファイル、それらをそれは並べて、「あなたの持ち物・展ー」とおどけた。すべてに作品風のサインをつけているのがなんだか照れくさくて、あなたはちよつとちよつと、と全部片付けて、するとそれは「あれ、これもこれもー」なんて机をすこし持ち上げて、あなたがさつき書いたサインを見えるように指した。「それはわたしのじゃないから、って、いや、わたしのだけど、わたしのじゃないからさー」ていうか、鞆に入らないし、と言って、クリアファイルから一枚のスケッチを取り出した。それは上から見た部屋の間取りのようで、紙の端には、おなじサインが書きこまれていた。「わたしの展覧会、みたいな」「え、なにそれ! 行きたーい」「いやいや、妄想だから」

作家とは作品の表面にあるものだった。「あれ、この鳥……」とあなたが、スケッチのなかの部屋の外を飛んでいる、ひと筆書きのカメモみたいな鳥を指さした。「これ、わたしが描いたやつじゃないなあ」「あなたが描いたら、こう、もつとリアルだもんねー」「なんで鳥がいるんだろ、これ」わたしとあなたとそれは不思議がって、ためつすがめつスケッチを回した。それは結局だれが描いたのかわからなかったけれど、あなたはそれを消すことなく、「それ、残しとこ。鳥が飛んでる展示とか、いいじゃん」あなたがやわらかく鳥から線を伸ばして描くと、まるでそれは鳥の軌跡のようで、そのまま線はぐるぐるとまわって、描かれた部屋のまんなかから伸びていて、まるで展覧会から飛び出てきたようだった。「ねえ、もういいじゃん、そんなじっくり見ないでさ、もー」とあなたは突然はすかしがってスケッチをしまった。そうだ、この時間のうちに、おたがいの顔をデッサンしなければいけないかった。絵の具で自画像を描くための練習で、わたしたちは三角形になって、おたがいを描きはじめた。「ババ抜きみたーい」「ババ抜きしながらする?」「こら」「じゃ、ジジぬき?」ババ抜きをしているとき、もしかしたらどこにもジョーカーがいらないような気がして、何をやり取りしているか不安になるのだけれど、ジジぬきのときは、それははじめからないので、不安にはならなかった。それはいつも、ジャックとクインとか、9と8とかを見間違えて、ペアにして捨てていた。「それ、隅の数字見てよー」「あ、そうだった」それで、結局その見間違えた一枚がジジだったりした。「あちゃー、グランドフアザー」「テレレレレレレレレレレレレ」「それ、ゴッドフアザー」「にしても、音痴すぎない? よくわかったね」「うるさいなー」「ギフ抜きとか考えようよ」あなたは画用紙の隅に、ああでもないこうでもない、と数字を書いて、「ギフ抜き」のルールを考え始めた。そうしているうちに時間切れになってしまって、「わ、まずい……」「ね。おたがい写真撮って、それで提出までに書いてこようよ」「あ、じゃあわたし撮るよ、写真部だし」「そうだったけ?

写真をうつしたはずなのに、どうにも自分に似てしまって、それはまだまだ未熟なんだよ、とあなたにひやかされた。「美術部の実力、みせてよー」とそれがせがむと、あなたはクリアファイルからスケッチを取り出した。「わっ、わたしそっくりじゃーん！」とそれが言って、見比べると、たしかにそっくりに描かれていた。「生き写しだよ！」「わたし、それ、使い方がう」「まるで写真だねえ」「まるでわたしの写真みたい」「その写真が上手いからねえ」「でしよでしよー」「遺影にするよ」「え、ほんと？……いえーい」「さむ、さむう」遺体は遺影に似せて化粧されてしまうのだから、遺影が良く撮れているに越したことはなく、つまり、死化粧は二重のフォト・ペインティングであって、写真よりずっと軽薄で、正當なものだった。カメラは方舟だ。いつもレンズからとりたいたいものまでのふさわしい距離をわたしたちは知らないまま、シャッターを押していた。

「わたしって、化粧とかする？」「しないしない、ナチュラルだって」「えー、そうなんだ、まあわたしもしたことないけど……」「わたしもないや」「でもあなた、美術部だからできそーじゃない？」「やってみようかな」「生贄は？」「わたしか、わたしだよねー」「じゃあ、それじゃない？」あなたは慣れていないと言っても、順調にその顔をつくろっていった。「絵に似てくはないけれど、でも違うなあ」「どんなふうにも？」「そうだなあ、だじゃれじゃ」「そりゃあ、それだよ」「わたし、そんなにダジャレばかり言ってるかなー？」「あー、動かないで、動いちゃだめだよ」「そう言われると、なおさら……」それはむずむずと震えはじめた。それを見てあなたもなんだか笑ってしまって、指先が震えて、アイラインがぐらぐらと揺れてしまった。教室ごと揺れているような気がして、黒板の上辺も、ドアの輪郭も、また同じようにぐらぐらと揺れていた。「あちゃー、それじゃ反対側も……」と言ってあなたは、反対の目のアイラインまで揺らし始めた。わたしたちはみんなシンメトリーで、それはつがいを書いたかたちをしていなければならなかった。いっぽう、化粧とはイラストレーションだった。チークの塗り方やアイラインの入れ方の形式はいつも發明されていて、鏡台は純粹に、しかしカメラとは異なる装置だった。「ねえ、まだー？」「なんか、始めるとはまっちゃってさ」「きりがないよー」きつ、とそれが睨むと、お待たせ、これでおわり、とあなたが筆を離れた。「わっ、なにそれ、それじゃないみたいだ」わたしが驚いたやらおかしいやら困ったようにそれを指してみたが、もはやそれではないようで、わたしたちは、生まれるまえにおりていたことを思い出した。そうだ、わたしたちは曲がりくねった産道の果てを抜けてこの世界にあらわれたとき、昼の光のまばゆさに感光したのだ。「これでおわり」だったのだ、ひとつの感光がひとつの命名ならば、わたしたちは生まれるときに、「これでおわり」と名付けられていた——諱だ。「おわりだ」と「はい」の間の句点こそ時間であった。

焼き増した写真をそれが持っていたので、わたしたちはそれを見ながら自分でそれに似せて描き直してみることにした。それは、まさに絵を描いて腕を伸ばしているわたしたちを撮っていたので、まるでそれは鏡のように一瞬見えることがあったが、それは動かなかった。わたしもあなたもそれも、動いていた。しかしわたしたちは気づいたので、無限にことなつてゆくことは、有限ののだと。それはわたしたちに幸いだった。「でも、ほんと

わたしの執筆は順調で、脚本は机に積み上がりつつあった。「わ！ 増えてきたね」「ぜんぶ上演するの？」「ムリムリ、エンジャが持たないよ」「エンジャ？」「登場人物さ」「きりがないもん。あんまり長くしたってお客さん退屈しちゃうし……」「えー、じゃあ減らす？」「んー、別にいいんじゃないかなあ」わたしは束を数えながら、適当にはぶいてやっちゃんってもらえばいい、と言った。「脚本は世界じゃないけれど、世界は脚本のなかにしかない」それはジレンマでもなんでもなかった。落とされたもの、見落とされたもの、知覚されないものは、存在しないのかもしれない。「あれ？」あなたは無意識に財布を取り出しそうになったけど、その理由はわからなかった。「あれ、あなた、眼鏡かえた？」

「え、これ前から持ってるやつだよ」「あれ、そっかあ」「でも、最近視界がぼやけてさ、ピンぼけの写真みたいで、合ってないんだよね。買い換えようかな」それだけで十分だとも思った。その言い副えだけでも空気は備給されていて、そのぴりぴりと乾燥した空気へ、稲妻が走るための先触れを刻んだ。「保健で習ったけど、わたしたちって、みんな早産なんだって」「種？」「え？」「わたしたちって種が？」「種？」稲妻が鳴り響くと、すべてが真白になってしまつて、それから遅れて音が届くけれど、その光と音のあいだ、わたしたちは震えあがつたし、そして、恍惚とした。

疑問文とは肯定文だし、つまりつねに否定を忘れ去った。「それ？」「なにー？」「いや、なんでもない」「ないんかいー」「わっ」つつこむように振り向いたその視線は静電気のようにわたしの皮膚を触発した。「不安になって、あれ、それどこいったんだろうって」「ああ、ごめんごめん、レポート集中してたから」それは紙の束を持ちあげて示した。「レポート？」「わたしたちの一生について」「あ、忘れてた！」「なんで言うんだよー、忘れてたのに」「もう、みんなで忘れちゃえばよかったね」「誰かしら覚えてるもんだよ、そーゆーの。ふと黒板とか、プリントに書いてあつたりして思い出させられる」「雨季はまだつづいて、窓の向こうの塩原の水面に波紋がひろがり、それは星空の死のようだった。それはその写真をとつてから、「うーん、ダメだー、これはとれない」と言つて席に戻つた。「不毛だねえ」「不毛だよねえ」「わたし、外のほうが不毛だと思つてたけど、まあ教室で話してるのも楽しいけどねー」「充実はしてるよ」「愛されてるよねえ」すべてはかならず二度起こるのであつて、一度しか起こらないものは恐怖だった。でも——最後の刻まれであるわたしたちの運命は、無為に向かうしかないのだし、あまりに畏れ多いその永遠の沈黙をせめて歌で満たさなくてはいけない。歌は稲妻を呼ばないけれど、でもそれ自体が稲妻のようにまばゆい光だったし、雨が降りつづけばやがて塩原は水に沈むだろうし、海のなかに雷は落ちない、塩水は電気を通すのだった。その破局のしびれは恍惚だろう、とわたしは思った。あなたもそれも思つていたはずだった。

「わたしたちの本能は会話なんだ」わたしたちの日常は会話で満たされていて、「わたしたちってさ、日常系だよねえ」「日常系だよー、あまりに日常——」ここでは会話が時間の代わりなのだった。「ねえ、わたしって将来どうするの？」「そうだなー、できれば演劇つづけていきたいな」「えー！ ぜったい観に行くよ」「それ、絶対観客席からわたしの名前呼ぶでしょー」「もうやんないからー、招待してよ」そうだ、観客席に座るのは、わたしたちが見殺しにしてきたそれらばかりだろうから、せめてあなたやそれが見に来んことを

時間は書かれ来ゆくものだった。わたしたちは持ち寄ったヘアカタログを見ながら、お気に入りの髪型を指さしていた。「それ、巻いたほうが似合いそうだけどな」「そーう?」じゃあ巻いてみようかなあ、とそれはボブの髪を手櫛ですぎながら、まんざらでもなさそうに言った。「最近無頓着でさ」「何に?」「んー……自分のことに?」「そうなの?」「わたしとあなたに言われなきゃ髪も切らないよー」「もったいなー」「きれいな顔してるのに」「肌にアザとかないよね、ほんと」わたしがその夏服の裾を引っ張って寄せて、腕をじろじろと見て、「それって一人っ子?」「うーん、生まれた時は双子だったらしいけど……」「え、奇遇、わたしも」「わたしもだ」そうだ、双子で生まれないものなんてなかったし、そして両方が死んだんだ。片方が遺影になって、他方が骸になった。わたしたちはだからいつも三人で——いや、だけになってしまったんだ。わたしたちは、刻まれた窮極だった。わたしたちは布団から生まれたのではなかった。「じゃあどこで生まれたんだっけ」自伝の序文は必ず虚構なのであり、その証拠に、扉には遺影がすえられた。「じゃあ、跋文も虚構かな?」わたしたちは、そうであったはずのわたしたちや、そうであるだろうわたしたちに憑かれていて、だからわたしたちの制服は漆黒だ。「その肌、真白じゃーん」「ふつうだよー」とわたしとあなたとそれは腕をならべたけれど、真白さはほとんど同じで、それは夏のよく晴れた塩原のように白く広がっていて、わたしたちはその反射する光にいつも焼かれてしまつて、教室の日陰にすぐ戻っていた。でも、もはや雨季だった。死は雨のようにしとしと降りゆき、もう救助なんてこないこと——ではなくて、救助はなにも償わないという音だった。別に、ずっと待ち続けてもよかったけれど、「でもさ、最近の髪型もついてけないですよー」「ねえ、これって永遠なの?」「イット、ウド、ビー、永遠」「なにさそれ」「wouldだよ、would、習ったじゃんー」「あ、willの過去形か」「で、わたし、その心とは?」「あすなる」「白書!」「青春だねえ」「青春はあすなるー」明日、わたしたちは何になるんだろう、と思つたけれど、そういえば、何にもならないことになることさえあるのだから、何にもならないのは、無理なのかもしれない、そう思うといっそう喉が渴いて、水を飲んだ。この水はわたしの汗になるし、汗と血の成分はとても似ていた。雨もまたかつて血であり尿であつて、やがてこの教室も雨下に沈むのだった。教室の床もただ広い塩原も、未知を平衡のなかにかくまつているように見えて、わたしたちはそろそろ幻滅していたのだ。雨、降れ! と、あなたが叫んだ。「降れー」「ふれふれ」

「ねえ、雨のシーンは、上演だどうするの?」「雨の音とか流しておこうかな」雨の音は水の降り落ちる音ではないのだ、それは、世界のすべての——死んでいったものたち、そして死にゆくものたち、死ぬこともできなかったものたちも含めた、すべての声を押しつぶした音、それが雨の音だった。わたしたちは、雨音の暗いこだまを開く雷に恍惚とした。稲光と、その音が聞こえつくまでの沈黙、わたしたちはなかば開いていた。「うひゅーのかんうめ」それが思い出したように缶詰の顔をして、あなたとわたしはけらけら笑つた、「なにそれ、それ」「うひゅーのかんうめだよー」チャイムが落ちた。わたしたちは身支度をして、教室の電気を消した。黒板や植木やメダカの水槽や、そしてわたしやあなたの輪郭がぼんやりその闇にとけていくようで、「あなた、わたし」それはそう呼んで手招きした。手を繋ぎ合つて、わたしたちはドアをなかば開けて、その狭い隙間から教室を

高いところの掲示物をみるときに踏み台になるのは台であって、それは机や椅子や、またわたしやあなたやそれでも代わりになれるものだった。それは外履きを脱いで、台を踏み台にして、それはわたしたちより高くから教室を見渡して、そしてまた降りてきた。

わたしたちはいつも見下ろされているので、たまには垂直に向かい合う必要があった。

「何見てたの?」「学級しんぶん」「そんなのあったんだ」「授業参観についてだってさ」わたしたちのわたしたちを参観する視線についてのガイドラインがそこには示されていたが、それはなかなか見られないものだった。床に立つ視線と、それが読まれる視線はねじれて交点がなかったからだ。わたしたちは教室のどこかに隠れ場所をさがしながら、「ね、それ」「なに?」「外履き脱がずに教室入ったこと、脚本に書いたら怒られるかな?」それは校則を破ったってへっちゃらで、「だってそうしたほうが間違えないからさ」と言った。わたしはそれも書いておくことにして、ほかに、あなたのことや、そのこと、ラーフルのことも、黒板、いくつかなくなってしまった脚本のページや、遊んで何本か折ってしまったチョーク、水槽のメダカ、塩原や、新聞、参観のこと、一つ前のこと、一つ後のこと、みんなで育てているけれど、水やりを忘れがちな植木や、学級文庫、机、脚本の束、センサー、鏡台、宇宙の缶詰、布団、おはよう、カッちゃん、世界、レポート、学級アルバムの中のわたしやあなた、それ、その持ち主の名前、土曜、英語、マッチ、教室、マドリ、他にもすべてのことを分け隔てなく書こうとした。学祭のためにわたしは、すべてを書きとおこうとした。「マドリって何?」「なんだっけ……」「生物の授業で習ったんだよ」

「えー、どんな?」あなたは記憶を手繰りよせながら、マドリについての御託をならべて、わたしはそれを逐一メモに書きとめた。「たしか、こう、鳥の中の鳥みたいなやつだった、まさに鳥っていうか、鳥オブ鳥みたいな意味でさ、マドリみたいな。マガモとかの、もっとう、鳥なんだよ。ハトでもカモでもなくて、まさに鳥っていうか、鳥そのものなんだよね……誰に見せても鳥なんだよ、鳥を示す鳥みたいな、で、具体的な生体は……」と言い淀んであなたは、「まあ、鳥みたいなものを食べて、鳥みたいなのところに棲むわけよ」と言った。鳴き声は? と訊くと、それがぴいぴいと口ずさみはじめた。「なにそれ?」

「かなりカナリヤー」炭鉱のカナリヤは真っ先に死ぬことで来たる死を示すというけれど、調子にのったそれは椅子の上にたちあがって、なんだかジャズだかロックだかオペラだかわからないような、ごちゃごちゃの素人の歌を即興で唄いはじめた。それはなんの歌かわからなかったけれど、ともかく泣ける歌でも、笑える歌でもなかった。でも笑えない歌でも泣けない歌でもなくて、その歌はたぶんわたしたちが逃げるまで続くのだった。わたしやあなた、ラーフル、黒板、いくつかなくなってしまった脚本のページや、遊んで何本か折ってしまったチョーク、水槽のメダカ、塩原や、新聞、参観のこと、一つ前のこと、一つ後のこと、みんなで育てているけれど、水やりを忘れがちな植木や、学級文庫、机、脚本の束、センサー、鏡台、宇宙の缶詰、布団、おはよう、カッちゃん、世界、レポート、学級アルバムの中のわたしやあなた、それ、その持ち主の名前、土曜、英語、マッチ、マドリ、教室……それがあんまり気持ちよさそうに歌っていたので、わたしとあなたは一足先に退散しようとした、ら、それもあわせてついてきて、電気を消したあとの暗い教室に、歌の反響だけが残っていて、まるで教室が歌っているみたいだね、とわたしたちは笑いな

全体はなく、ただ集合しかなかった。わたしが脚本の整理に無頓着なうえ、いつもちがった机に座るので、(それはあなたもそれもそうなのだけど)教室のいたるところに散逸していた。ときおりそれとあなたがそれとなくまとめていたけど、いちいち並べて呼んだわけではないので、一部はなくなってしまうていた。

あかねさす日のあかねさす布団かな

まぶしさに、ううん、とわたしがうなって、あかねさすという枕詞はすべての言葉につくので、あかねさすあなたとあかねさすそれあかねさすわたしを起こした。「あかねさす塩原」「や、雨だけどね」教室にも俳句が奇ならば短歌は偶だ。

あかねさす日のあかねさす布団かなかなかなかな

蝸の声を最後に聞いたのがいつだったか思い出せなかったけれど、それはまるで、止まって初めて気づく空調音のように、世界の音に化していた。この布団もとうとうへたってきたので、そろそろ寿命だった。光はわたしたちを削ぐから、過度の露光は厳禁だった。光の恐怖は生まれてすぐに知っていた。火は光を殺す息子であって、そのためにわたしたちは火の奴隷だった。夜もまた太陽ならば、そちらへ完全にうつってしまうがいい。そうしたら、あの塩原のまつすぐな地平線も消えてしまっただろう。レポートの提出期限だったので、わたしたちはおのおの取りだして見比べた。「ねえ、生まれたときのことって、どう書いた?」「そんなの覚えてないんだから、テキスト」「でっちあげ?」「みんな生まれたときのことなんてでっちあげてるよ」自伝の序文はかならず虚構だ。「じゃあ、跋文も虚構?」「バツブン?」「バツブン?」「ちがうってー、終わりのことだよ、死ぬときのこと」「わたしもわたしも、死んでないし」「え、書けて指定だったよ」「ほんと?」「想像して書けてことじゃない?」「想像できるなら書いてもしょうがないよ」そうだ、わたしたちに死刑は通用しなかった。それが効くのは、神経症だけだった。「ねえ、センサーは?」「センサーは……」「センサーは、かなかなかなかな、なんて、だじゃれじゃないかって怒るだろうね」「怒る怒る!」「じゃあセンサーの模範解答こそ、なんなんですかって思うよね」「なんだっけ」

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

「どーゆー意味?」「あかるい道で。そしたら、自分の命だなあつてことでしょ」「なんでー?」「なんでかなあ」「これ、なんでもつきそうじゃない?」「あかねさす日のあかねさす布団かなたまきはる我が命なりけり」「ねえと喚ぶ声す繭よりおのおのにたまきはる我が命なりけり」「万能だなー」「でもわたしたちは使っちゃダメだね」それから、その披露するだじゃればかり聞きながら、そうだわたしが死ぬのはわたしたちが絶滅するときだ、とそれぞれに考えていた。つまりわたしたちは死ぬことはなく、レポート課題のほう

「わたしさあ」「なに?」「いや、わたしの話」「あ、ごめんごめん」「わたしさあ、ずっと前——そう、ずっと昔は、戦っていた——ような、そう、それは、宇宙のかたちをとったり、愛のかたちをとったり、隣の国や、剣道や、自然や、よその男や——あるいは、他の——ともかく他の何か、へ、こう、戦って——ううん、戦っているっていうのも、それは暴力を指したりしない——そう、外側へ向かっていたんじゃないかな、って。上の、外のほうへ向かっていたんだ——わたしたちを視てくるなにか、視線に受けてたつ、視線を受けてたつ、わたしたちは、その視線のひしひしとした痛みが皮膚にささるのを感じて、ああこれがわたしの——輪郭——を体にして、くれていたんじゃないかと思って。電気だよ。電気がわたしたちの肉を、骨を——照らしだしてくれていた、んだ、っちゃ、ないかな、って思っ。わたしたちは——勝つために生まれた、はずだったんだけど、勝つために、勝つために……勝つために、身体を作って、差し出したんだ。そう、そうだ、わたしたちの身体じたいが生贄なんだ、勝鬨のための……。ね、血を流して、死んでゆくことで、勝利を得たの——よ、死刑で死ぬふりなんかして、英雄になろうとした——ヒロインに……死刑で死ぬことなんてないのに。ね、笑いながらごまかしてさ。ね、でも、気づいた——絞首台にさ、乗りたくて乗ってるわけじゃないんだ。そんな見たことも聞いたこともないんだし——そのわけのわからない、呪われた父親のおわらない解呪——でもそれが——でも部屋の外には出られなくてさ、決めるしかなかった——わたし、どっちも知っててさ、それは、毎回、勝つか負けるかなんだよ。勝つか負けるかしらない——負けたらどうなるかなんて想像つかないでしょ、怖いでしょ、布団の上には天井があって、朝目覚めて初めに見るのは必ず天井だったよ。負けるのは心地よかったけれど——行き止まりだったよ。天井を見ないようにするには、布団の中の夢に閉じこもるしかないんだ——そうやってみんな、白い、あの白いシーツの下の敷布団のふわふわにつぶして、そのまま——でもさ、夢の中に戦いなんてないじゃない。だから——戦わないで死ぬことを選んだみたいなものだったんだ。ずっとそこにいる方法は——そうだなー。正午に飛び立つことだったんだ。それが一つの、ある一つの終わりだった。もう一つも言うね。勝ち続けるってことは、呪いを受け継ぐってことだった。もう一度。もう一度。もう一度、同じ天井……勝つことは、再生産だったし、結局兄弟の相打ちで終わった。

教室は戦いを抑圧しないで済むようにしたミニチュアだよ。抑圧するからもどつてくる。教室は、ぎりぎりまで薄められた安寧の戦い——ここでは戦いを否認できるんだ。宇宙とか未来とか、わけわかんないものとか、ほしがりながら、知らないふりした、倒錯だからいらいらしないんだ。毎日が楽しくて、文化祭で、友達で、部活で、授業で、ともかくそれはスマートだったし、戦いはまるで——小さくて、ライトだったよ。どこまでもライト。なんでも言ったことがそのままになる魔法なんて、それこそほんとにセカイ系ってやつだよ。でもさ、ここからは——倫理の問題だよ。無視された戦いはさ、誰かがしわ寄せを食ったんだ。あらゆる時間の、あらゆる空間の、どこかで戦いがあって、ねえそれを全部さ、全部……なくすときに、わたしたちは死ななくちゃ。それは死刑で死ぬふりなんかじゃなくて、流刑なんだよ。わたしたちはわたしたちの言葉で、どうやって死ねるんだろう。戦いをなくすためには、死なないで死ぬしかなくて、それは祝福なの?」「だれの

それは教室の夢だった。わたしたちの教室に死角はないので、紛失した脚本がどこにいったのか、てんでわからなかったけれど、いや、それはもう存在しなかったのかもしれない。胸板うっすーい」「デリカシーないな、それ」「だって、みて、全然奥行ないよー、あなた」「ここら、それ、本人も気にしてるんだろーから」「気にならないよ」「ていうか、わたしも胸板うっすいじゃーん」「なんだと」わたしたちはいつも正面から向きあっていたのだから、だからおたがいの厚みについては全然知らなかった。

「それにしても、退屈じゃない?」「退屈は退屈で心地いいけどねー」退屈は過去にひっぱられている時間だけれど、しかし、過去なんていわれても、わたしたちに過去なんてなかった。過去のないわたしたちをひっぱっているのが何なのか、わたしたちは気にすることもなかったけれど、漠然と、いつかそれと、わたしたちははじめをつけないといけない気がした。たぶんそれは、わたしたちの世界で一番強い相手だったけれど、でもこちらから出向かない限り、それはふわふわにわたしたちを包み込んで、わたしたちの眠りを受け入れただろう。それはひっくり返したラーフルのようにふわふわはずだ。「ラーフル」わたしたちはそれをラーフル以外にどうやって呼ぶのかよくわからなかった。「ねえ、わたしたちはスーパーマンだよ」「なんで?」「こーんなつまんない授業、飽きずにうけるからさあ」「たしかに」白い色はありふれているから、ないようにあって、だからわたしたちの制服は漆黒だった。わたしたちはアクティブだったから。「テストとか、ぬるいよねー」「ぬるいぬるい。部活もぬるいし」わたしたちのテストはほとんどがマルバツで、照らしあわせれば、どちらにすればいいのか答えは簡単にわかったし、しかも結局はほとんどがマルだった。わたしたちは、マルとわかっているから、不安になって、それなりに努力して、三人で協力した。だから成績は大体よかつたし、そのうえ、不安だけど結局マルなのが、それなりにまあ、心地よかつた。そのかわりわたしたちは、過去も未来もマルにとじこめて、それはあまりに幾何学的で、バツとちがつて交点がなかった。ものすごく目がよかつたら、丸い星をぐるっと視線が回って、じぶんの背中が見えるかもしれない、なんてなぞなぞを見たことがあつたけど、でも、ビルが一棟でも間にあつたら見えなくなるように、マルって実は果かないものだ。

三人で旅行に行ったことはあつたし、温泉にも入ったけれど、でも裸の付き合いをしたわけじゃなかった。ふわふわのタオルをぐるっと丸く巻いて、それは水に濡れるとちよつと見えそうであやういんだけど、でも、あまりに水を吸って重くなる前には、わたしたちはいつもの制服で体を隠していた。「どこに旅行に行ったんだっけ?」「どこだっけ」「たぶん、教室だよ」「教室旅行かあ」「文化祭じゃない?」「あれ、じゃあ、温泉じゃなくてセントー?」「セントー、いいね。また行きたいね」「なんか、ほっこりするよねえ」塩原の水は、どうにもぬるすぎだから、お湯につかって体が痒くなること、血管がふくらんで紅くなること、わたしたちの身体の話だった。それはタワーの代わりで、不安でさえあるものだったけれど、でもその不安を身体が記憶することで、わたしたちは、ささやかに、未来を手に入れた気がした。ただ、それは無限の有限だった。黒板は湯気のように白ぼんできて、ラーフルでいくらこすつたところで限界があつた。でも、いつかこの教室が雨の下に沈んだら、この白い痕もすべて溶けて流されてくるのだろう、とそれは思つて、二度寝し

ダッシュはいつも得意なことだった。体操着に着替えたわたしたちは、その得意げな香りをうつつすらと感じながら、その体操着の白さにならず不安になった。それは日に照らされると、まぶしすぎて、光が拡散してしまうのだった。集合写真を撮ったとしたら、誰が誰かもわからないだろうし、わたしたちの世界はすべて集合写真のだった。

「なにさ、じっと見ないでよ」その大きな眼球がこちらを向いているのを見て、わたしは形式的にそう言ってみた。「別に見られて困るわけでもないくせに」「まあ、そうだけども……」「それに、見てないですし」「なにさ」「そっちのほう向いてるだけ」「さすが写真部、観察を怠らないね」「こう、呪文とか唱えたら、びしょぬれにならないかな」「ほらー、そういうこと言う」わたしはびしょぬれにならないままに、びしょぬれになってしまった。わたしたちは、厳密に書けば、わたしたちの身体は呪文を喋るのだった。だからわたしたちは鞆にすべて詰め込んで、とりわけ学生証は大切だった。ティーンが魔法を使うのは、学生証が魔法のカードだからだった。呪文は恐ろしいから、本音なんてものとはとくに忘れてしまった。じゃあ、わたしたちは何を話し合っているんだろう、と思う、それすらも、わたしたちは忘れた。呪文は言葉だけど、言語じゃなかった。この脚本は、翻訳されている。「呪文で詩は書ける？」わたしたちは、わたしたちがなぜ存在するのかを、忘れたりしないことに決めた。「ねえ、転校生の話、知ってるー？」「え、なにそれ」「知らない！」それがやつきながらもったいぶるので、わたしとあなたはじれったかった。「どこから来るの？」「向こうからだってさー」向こうと言うと、塩原の向こう側のことだった。「へー！」「雨季で、日の光に焼かれなくてすむからね」あなたがなるほど、と言ったようにつぶやいて、「名前とかわかるの？」「なんだっけ、えっと……アイ、かな」「ふうん」「可愛い名前じゃん」そう言ってわたしは指でマルをつくって、あなたの頬に押し当てた。「いつごろ着くの？」「んー、手続きが終わったら、じゃない？ わたしたちも手続き、したじゃん」「そうだっけ」手続きといっても簡単なもので、自分の名前を書いたり、写真を貼ったり、ちょっとした面接をするくらいのものであった。

わたしたちはみんな同じように笑うし、同じように泣くし、「ねえ、向こうに行ってみたくない？」「いつてみたいけどさあ」「ほら、じゃあいこうよー！」「でも、いつ、向こうに着くのさ」「うーん」それは、それは聞かないでというように苦笑いして、「ゼツタイ途中で力尽きるよねー」とため息をついた。いまは雨季だから、すぐに日に焼け尽くされてことはないだろうけれど、雨季が晴れたら、わたしたちはもたないだろうし、そして雨季が続いたら、溺れてしまうかもしれない。それ、トンカチ？」「トンカチ？」「泳げないかってこと」「そんなの、言いまわしの問題だよ」時間はなかった。わたしたちは体操着のまま、小雨の塩原に出て、空に向かって口を半開きにして、「うひゅーのかんぷっは」と、雨を口に受けてむせこんだ。「うひゅんがは」「うひゅは」「うひゅーの」「うくっ」「うひゅーのかんぐ」理由なんてないし、展望もなかったから、わたしたちは戦うことをそれぞれに据えるしかなくて、水を飲むこともひとつの戦いだった。水を飲むこと、雨水を飲むこと、すべての水はかつて血だったのだ、彼女たちが流すことを選んだ血だったのだ。わたしたちに生理はこないのだから、せめて水を飲むんじゃないか、そう叫びながら、わたしたちは待つのをやめた。理由が展望になるようなマルを、わたしはそれの体

書いているわたしは誰にも視られていなかった。だから、想像で書かれたいくつかのページを混ぜ込んでしまっても、問題はなかった。束を整えながら、「うひゅーのかんうめ」なんてつぶやいて、口を半開きになると、世界を唾えて、しゃぶっているような気がした。リズムよく口を開け閉めすると、奥歯があたって拍子になった。拍子が三回繰り返せばもう永遠で、わたしはわたしの口の色や舌のやわらかさに溶けていくような気がしていた。それはまるで無で、無から、曲がりくねった道、進んでもまたもどつてしまうような廊下より先に在った教室のドアは手をかけられると、その輪郭が描きだされた。白い壁にとけあっていたドアが切り離されるように細く輪郭が描かれて、それはそのわたしの手によって開かれた。

あなたも自分のことをわたしと言うのは、わたしにとって不可解だったが、いつしかわたしは、あなたもあなたでわたしのだと知っていた。「そういえばさ、わたしたち、おたがいのこと全然知らないよね」「たしかに」「出身地は?」「名字は?」「電話番号は?」「身長は?」「体重は?」「それは言わな〜い」「わたしたち、いつ出会ったんだっけ?」「クラス替え?」「新学期?」「幼馴染?」「おたがい、謎だよねえ」「覚えてないなら、幼馴染なんじゃない?」「双子かもね」「三つ子ね」わたしたちはじつと顔を見比べあった。似ているような気もするし、似ていないような気もするし、ともかく、じつと見つめられるのは、くすぐったいし、限度があるように思えた。あなたもそれも、それぞれの視線そのものになって、わたしの顔に向かってきた。「三つ子でも双子でもさ、もともとお腹にいたときはさ、三人つきり……って面倒だな、双子だったら、二人つきりじゃん」「そりゃたしかに」「おたがいにぶつかると、お腹が叩かれるのと、区別つくのかな」「タイキョーだね」「絶対、地震だと思っつてー」「いやいや、赤ちゃん、地震知らないよ」わたしたちの世界の地震は規則的で、それが来るときにはわたしたちはいつも準備していた。その静かな揺れは塩原に張った水に波紋をつくり、映しあっている空との関係をくずした。教室もがたがたと揺れて、いつかそれは崩れそうだった。もしかしたら、この見えない壁の裏からたくさんのダレカがわたしたちを見つめていて、そのたくさんのダレカが一斉に教室を押し揺らしているのかもしれないけど、そういえば、裏側っていうのはどういうものだったろうか、教室の裏側は教室じゃない。わたしたちはそんなもの信じていなかったけど、それでも時々不安になった。向こうは外じゃなかった。

ほんとうにこの脚本は無から始まるのだったろうか? この脚本の始まる前に無が広がっていて、この脚本の終わった後にもまた無が広がるのか、その無が広がっているところは無なのだろうか、じゃあ、この世界にあるのはこの脚本だけだし、この脚本には黒い文字と白い余白が刷られていた。わたしが、塩原の向こうへじつと目を向けていると、わたしに向かつて何かの音がした。「え?」「だから、何考えてるの?」「え?」「何考えてるのーって」それがそう訊いていたのに気付いて、わたしはすこし困惑しながら、「わからない?」と返した。「わかんないよ」「そっかあ」わたしは安心した。わたしもそのときは、わたしの考えていることがわかっていたいなかった。それがもしわかっていると一言言ったら、たぶん壁の向こうのたくさんのダレカが、壁を破って教室をめちゃくちゃにしに来たかもしれないかった。その手にはたぶん、わたしたちがこれから書く脚本の頁が握られている

「おはよー」「おはよう」「おはよー！」わたしたちはまた布団から立ちあがり、制服の裾を正した。「ほらっ」それがふぎけてあなたのスカートをめくると、「こちら」あなたがその頬を引っ張って嗜めた。めくられた向こうには裏側があつてしまうのだから、めくられるのは恥ずかしかつた。「ちくしょー、ロマンだよー」「なによ今さらロマンなんて」あなたはその頬を存分に引っ張ったり伸ばしたりしたあと、話した。「ていうか、それ、靴ぬいでないじゃん」と言つて、あなたがその足を指した。すると外履きのままのその足があつた。「校則守んなさいよ」「こうしないと間違えるんだもんー！」とそれが口を尖らせていると、あなたが、足元を指さしたままの手でそのスカートをめくつた。「ちよつとー」「お返しだよ」

失われたものを虚構で償うのならば、虚構で失われたものは、虚構の虚構が償わないといけなかつた。じゃあ、虚構の虚構で失われてしまったら、もはや打つ術などないのだから、そうだ、それは十全でないといけない。完全に満たされたまま、何も失われてはいけないのだと、わたしたちはそう信じていた。斥けられない禍い、それを世界にしなければならず、それが回帰しないように、わたしたちはカレンダーを焼き払つた。もつとも焚書されるべき書物、それはなによりカレンダーだ。禍いは回帰せず、そのままにそこにあるべきだつた。雨季はつづいていた。「お嫁にいけなくなるよー」「パートナーもいないくせに……」「わたしのパートナーは世界だから」「ふうん」「つれないなー」それでも世界と心の中なんてできるんだろうか、ほとほと謎だつたし、いや、世界は書かれるからあるのだろうか、それとも読まれるからあるんだろうか、じゃあ世界と心中するのは、わたしとあなたどっちがふさわしいかなー？」「ちよつと、間違えないで」かぎかつこはわたしたちと世界との輪郭だから、わたしたちが喋っているかぎり世界と心中はできなかつただろう。課されたレポートのテーマは「わたしの一生について」だつた。「わたしの一生について」「あれー、いましゃべつた？」「しゃべつた？」「聞き間違えかなー」「読み間違えじゃない？」「レポートは出さなくてもどうせ怒られやしないだろうと思つて、わたしたちはずっとおしゃべりとか、愉快なことばかりしてよかつたし、「ねえ、何してたんだけ？」「なんだっけー？」「別に思い出せないならいいじゃん」なによりわたしたちは焦つていなかった。「あー」「ああああ」「うん、うん」「そうそう」「いいかもね」「それそれ」「あーあーあー」そうやつて音で満たしていれば十分だつたし、満たされていたし、塩原で方角なんてわからなくなつた。「わたし、この教室が世界の中心だと思ふんだよね」「きた、天動説！」「いや、なにも動いてませんからー」「ねー、この変わり映えない景色よのー」「よのーよのー」媚びるのはやめたのだつたし、全ての景色は塩原でもう充分で、そうだ、空間や時間に空間や時間を割くことにはもう飽き飽きしていた。「命令形ってなに？」「命令形？」「命令するやつじゃない？」「命令して？」「言われたとおりにすること……」「名前のこと？」「名前は命令じゃないけれど命令形だつた。「ねえ、どこに向かつてたんだけ」「教室だよ」「じゃあ、もういつかー」もういいねー、と言つてそれは、マッチ、そこにそうしてあつたマッチを取り出して、わたしが書いていた脚本の束に火をつけて、よく燃え始めて、よく燃えて、それは心中のための火だつたのだろう、教室の床も、ここではよく燃えるのがまさに教室だつたから、「それ

ねえ、見えてる？ 見えてますか、おーい。見えてたら返事してください。返事、どうするかって言うと、たぶん、こう……なんでしょね、刻むというか、変えようとする必要があると思います。結構簡単なことですけど、でも脆弱ですよね、というわけで、まあ軽い気持ちで、こう、空メールみたいなのでいいんで」わたしたちは特に不安に苛まれることはなかったのだ。総当たりは別に奥の手ではなかったし、しばしば聞く「終わり」の都合は、そもそもわたしたちの責任や交渉材料にはないのだから、今更気になる必要はなかった。とどのつまり、きりのよさだった。良さというのは、それは美の話だった。世界の始まりは知ったことはないし、いちいち振り返る必要もないのだが、世界の終わりは美の手のひらのうえで、そうだ、世界には適度な小ささがなければいけないという、あの恐怖に苛まれていたんだろう。知ったこっちゃなかった。「どう？」「うんともすんとも」「Test」「あれ、今のじゃない？ はいはい、もしもーし、もしもし」「わたしたよー」「勘弁してよ」それはときどきこういったはずらをした。「いやーだって、それはこう書いたほうがいいよ、『あなたはときどきこういったはずらをした。わたしもそれも、あなたがそう返事してくれるのを期待していたから、そんな簡単に介入できたならば、拍子抜けしてしまった。わたしたちはもう窓を開いたり閉じたりすることは日常のひとつに回収して、つねに窓は開いていたり閉まっていたり、あるいは開いても閉まってもまだいいいもしかしたらそれからそれからもしない状態であつたのであつて、わたしたちはそういった二元論自体が地平線を引いてしまふし、垂直も生むもので、それは教室のこの床の整然と並んだ木のタイルへも侵食していた。ここで初めて書くことだけれど、壁は垂直だし床は水平だった。ためにビー玉を床に零してみても、どこかに集まることもなくて、まるでお互いが地動説を認めないようだった。「結局こうなるわけだよね、みんな太陽って感じー」それがそのうちひとつを指で弾いて他のそれぞれにつきつきにぶつかって、それはひとつひとつが test, test, test, というような破裂音だった。「Test」「Test」「Test」

窓が開かずも閉まらずもせずにも窓であるような状態で、わたしたちはいるのだから、いくらでもここにいてよかった。わたしたちはこの身体の輪郭のなかのきりのなさを知っていた。「ギムキョーイク」「ギムキョーシツ」「ギムナジウム」通過儀礼はなんだかんだ必要だと思っていたし、それはだつて基本的なチュートリアルだったのだ。「中途リアルってことですかー」「それって本当地獄耳だよね」あなたはこれ見よがしにそののだじゃれにほくそ笑む。「ずっとガクセーでいたいけどねー」「それは同意」すべての存在は教室にいて女子中学生なのだ、義務教育の恩恵のなかで、机も、椅子も、カーテンも、窓も、窓の外に見える景色も、黒板消しも、黒板も、「ていうか黒板の文字消しであつて黒板消しだよ」文字を消すとなにもなかったことになるんだ、わたしたちの教室では。たとえばこんなふうに、

「ね。」

「ぶはっ」「何もしゃべらないと息つまるねー」「ねえそのぶん、どうするのさわたし」「え？」「空白も文字数に数えたら、レポート、再提出になりそうじゃない？」「さすがにねー」じゃあ燃やせばいいね、とそれは、マッチ、そこにそうしてあつたマッチを取り出して、わたしが書いていた脚本の束に火をつけて、『って書いたらびっくりしそうだよね、あ、そろそろき

「作者がこの文字のこと？」とわたしが、教科書の目次に並ぶ小説の題名の下に並んだ名前を指さしてあなたにきいた。「そう、その文字のこと」「文字が文字を書くの?」「文字が文字を書いているってこととして文字で書かれてるの」「あー」「じゃあこの、『吾輩は猫である夏』を書いたのが『目漱石』さんだよ、ってことが書いてあるのが『吾輩は猫である夏目漱石』っていうことなのね」「そうね」「じゃあこの吾輩ってだれ?」「ん?」「んー?」「あなたはちょっと一行ほど戻って読み返して、「いや、なんか変じゃない?」「変?」「たぶん、吾輩なのは、猫である夏目漱石さんだよ」「あ、そういうことか?」「俳句だね」「あれ、じゃあ作者は?」「あれ、消えた?」「あなたはもう一度読み返して探してみたが、たしかにいつのまにか作者というものは消えていて、「ていうか、『吾輩は猫である夏目漱石』の作者が『吾輩は猫である夏目漱石』ってことでいいんじゃない?」「まざってない?」「だって、どっちも文字なんだから」そうだ、すべて文字ならさもありなん、だった。「え、じゃあ夏かもしれない?」「そうだね、夏かも知れない」「俳句だね」

吾輩は猫である夏目漱石

そこでは夏が猫で吾輩だということを目漱石が言っていて、「ワガハイって変な名前」「普通の名前ってなに?」「普通の名前は……そうだなー、にゃーにゃー」とそれは猫の鳴きまねをした。「それは猫である、だ」それは猫であるわたし。

世界との輪郭を持たなければ世界だった。わたしたちに刺さる視線と世界に刺さる視線はそれは同質で、シームレスだったから、まるで世界じゃないなんて、おこがましかった。しかし、完全に溶けているわけでもなく、わたしたちは呼ばれるたびにきちんと顔を見せて返事していた。だって校則だったのだから……それだけはすこしやんちゃだったのだけれど。あらゆる言葉は命令形でなくても出頭命令で、そうだ、むしろ命令形だけが命令じやなかったかもしれない。やめる。やめて、やめてくれ。自殺は不可能で、わたしたちはそれを幸せとか不幸とかも思えなくて、それは倫理の範疇ではなかった。否定は否定の肯定だけど、肯定は肯定の否定ではないのに、そういったアンバランスがないかのように塩原は広がっていた。わたしたちはそれぞれに黒板に書いた。

吾輩は猫であるわたし

吾輩は猫であるあなた

吾輩は猫であるそれ

「猫になりたい」「え?」「いや、猫っていいなあと考えて。猫耳とかつけてさ、」「それってお約束だね、わたしらみたいなのは」「あるある」「あるーある」「そう、わたしたちって生まれた瞬間から猫耳つけてるからさ、いつそ猫になってみたいなと思って」「もうなってるよ」わたしとあなたとそれは布団の上で猫でいて、教室はじつくりと。爪で布団のシーツをひっつかいて文字を書こうとしたが——いや、書こうとしたそれは文字であつたかもしれないが——しかしできあがったのは、書こうとしたそれには似ても似つかない、書かれあがったそれであり、わたしとあなたとそれがそれぞれにそれを書き重ねて、それはなにがなんだかわからない痕跡になり、シーツの弾力によりすこしずつ浅くなって消え

それは金曜の四時限目の物理ではなかった。「そうだよ、わたしは金曜の四時限目の物理じゃないよ」それはその肯定をもってして、それを否定した。あなたは少し読み返して、合点がいったように「たしかにそれは金曜の四時限目の物理じゃないね」とそれを否定した。わたしはそれをそのようにそのまま書き留めた。「わけわかんないねー」とあなたが言うのと、「でももう過ぎたことだからねえ」とあなたは過ぎたそれらを見ながら言った。過ぎたことは過ぎ去らないけれどそこまでかさばらなくて、たしかにずっと過ぎたことはまるで過ぎ去ったようだけれど、風化はしなかった。それは距離としてそこにあるのだが、しかし教室が広くなるわけではなかった。わたしたちの世界は、濃くなっていった。水溶液なら飽和するだろうけれど、わたしたちの世界に飽和はなくて、いくなればぎりのいいところが飽和だった。飽きるほど和んだら、飽和だった。

はつきりいつてわたしたちは嘘じゃなかったし、嘘は嘘を知らなかった。「ねえ、それってどんな写真撮るの?」「んー、セルフ? ポートレイト? みたいなー」「自撮り?」「ざっくり言えばねー」それはそういつてわたしとあなたを手招きして、並んでわたしたちの写真を撮った。「それ、自撮り棒ってやつ?」自撮り棒はカメラのレンズとわたしたちとの距離をはなして、まるでわたしでもあなたでもそれでもないだれかがわたしたちを撮ったみたいだった。「ねえ知ってる? 真ん中の人が死ぬって」「真ん中の?」「三人で並んだ写真の真ん中にいると、魂をとられるんだって!」あなたがおどろおどろしく言いつて、わたしたちは誰が真ん中だったか決めることにした。「真ん中と言ったらあなただよー」「なんでさ」「だって、だいたい二番目じゃない」「いや、三番目だね、わたしは」「est」「わたしは一番目だって」「わたしはそりゃ一番目でいいよー」「じゃあ、わたしとそれどっちが二番目か、つてことでしょ」「わたしはぜったい三番目ーだもん」結局二番目を見つけることは出来なくて、そこには一番目と三番目しかなかったし、もしかしたらそれも一番目で三番目だったと言つてもそこまでおかしくはなかった。カメラはもともと部屋という意味で、カメラ・オブスキュラは暗い部屋、晦渋な部屋だった。教室の薄暗さは黒板の深い緑をまるで黒い板のように見せていて、あなたが白いチョークでわたしたちを描いた絵が、それまで描かれてそのたびに消された痕跡の上にまた新しく、やがてまたそれも痕跡になるものとして、ささやかに光っていた。「黒板に絵を描くときはネガで描くんだ」あなたは白いチョークで明るさを描きはじめた。光を描いては消して書いては消して、そういうえば黒板は端っこの席からも見えやすいように曲がっていたのだ、レンズのように。「端っこつてどこ?」「端っこがもう見えないところーだよ」それは端っこからわたしたちを撮った。ぱしゃぱしゃという音が響いて雨季は塩原にあった。その写真はまるで何かを残しておくためかと思つたけれど、「現像には暗室があるねー」「暗い部屋?」「そー」夜まで待てばいい。そう言おうとおもつたけれど、夜は来なかった。夜は来なかった、とわたしは書いた。「ねえ、ポートレイトつてつまり肖像?」「「シヨージョー?」「肖像る像」「あー」それならわたしたちはみんな肖像だったろうし、わたしたちの肖像は肖像の自乗じゃなくてやっぱり肖像だった。「水いる?」とあなたが差し出したそれをわたしがひと口飲むと、わたしは消像になって、あつ、つまり水ってシなんだった。だから零が死ぬには、滯がよかった。わたしたちは零余子だから、水を飲んで余りを清算して、滯子が世界の主

モノポリーの一周は、一日でも一カ月でも一年でもなくてただ一周だったし、終盤では自分が何周目のジエイルなのかもわからなかった。「ねえ、わたしたちのいる側が鉄格子の中なのかな、外なのかな」「囚人のいる側がどっちかってこと?」「でももしそっちが外側だったら囚人じゃない?」「でもしまし着てるよー」そうだとどちらにしようと思っただけを着ているのが囚人だった。外が中で中が外なのだから、鉄格子を着ていることが重要だったのだ。

モノポリーでいちばんはじめに駒を置く枱には「ゴー」と書いてあって、そうだと全ての瞬間はそれそのものが命令なのだろう、行くことだ、行き着くことではなくて、行くことだけが言い渡された。「行くつつたつてねえ」家庭科の課題はわたしたちの一生をすぐろくに見ましようという内容で、じゃあこれでいいやと面倒くさがるのそれは紙いっばいにひとつ大きな枱を書いて、それに教室と一言だけ書いた。「ねえそれこれってどう進むのさ?」「いや、サイコロがないんだよ」「逆転の発想だ!」そうだと既成の可能性はそこにはなくて、「じゃあこの外は塩原だね」「そうだね、真っ白だ」とそれは言つて教室の中を暗く塗りつぶし始めて、白い紙の真中に黒い四角だけが残った。

■

「行き着くところまできたねえ」そのすぐろくは始まった途端に終わりだったし一周も二周もあったものじゃなくて、サイコロすらないから、わたしたちは黒い四角のなかで銀色の駒を好き勝手に動かして、用意していた駒だけでは足らずに鉛筆とか消しゴムとか、時間割りや黒板消しや黒板や、わたしやあなたやそれを載せてすぐろくを始めて、それはすぐろくというよりままとだった。そのすぐろくままとのなかにはそのすぐろくままともあって、それを遊ぶわたしたちをわたしたちは遊び始める、という夢を見た。「はっ、夢か」「夢中夢じゃないって言える?」起きた回数と寝た回数をきちんと記録しておかないと、いま自分が何層目の夢にいるのが正負までわからなくなってしまう。

「むちゅーむ」「むちゅーむー」「じゃあ現実じゃないってこと?」「全部夢かもしれんね」「じゃあ夢って現実なんだね」「現実中現実だね」「刻一刻」「東北東」「日曜日」「夢が現実なら、現実の中夢でもいいし夢中現実でもいいね」わたしたちはつねにこの教室に夢中だったし、黒板や、ラーフルや、おたがいや、時間割や、次の授業や、すぐろくや、■に夢中だった。「ねーこれどうやって読むの?」「え?」「科白の読み方チェック、女優としてトーンでーす」とそれは胸を張った。「え、だからどれさ」「■つてやつだよ」「今読めたじゃない、それはそう読むの」「■?」「そう、■」あなたはそれのすぐろくからカッターで切りだした展開図を折たたんで真つ黒なサイコロを作った。「さすが美術部」「このサイコロ、■か■か■か■か■か■が出るわ」さっそくそのサイコロを振ると■が出たので、わたしたちは駒を■から■進めて■に置いた。何度も使っていたらサイコロが壊れてしまって、突貫で作ったから仕方なかったけれど、その中は教室になっていた。あなたがサイコロを作るときに下敷きに使っていたのは脚本の束だったので、何枚か切れてしまったけれど、だってまた書けばいいのだから、同じものを書くなかって不可能だけど、別にまた書けばいい

「わたしたちって絶滅するのかな?」「そりゃ、いずれは死ぬことになってるでしょ」「いや、そうじゃなくて、こう、わたしたちがいることもいなくなることもないことになるかな、って」わたしたちは子どもをつくって殖えることができなかつただろうから、だから一方的に消えゆくようにはできていなかった。「ていうか、いずれって何?」「うーん、どこか、ってことかな」そのどこかのわたしたちは言い得てしまっただろう、「いずれは生きることになってるでしょ」などと。生きたわたしたちと死んだわたしたちはどこかのまたどこかで鉢合わせになるとき、わたしたちは二重に死んで二重に生きただろうし、その痕跡は痕跡をなぞった痕跡だった。「何も残らないには、何も残らないが残っちゃうから、ちよっとキビシーんじゃないかな」「時間が止まるってこと?」「時間よ止まれ、と書けば書くほど時間は進むのだから、時間を止めることは時間を止めようとするのでは決して不可能なのだった。「なるよーにしかないよー」とそれは椅子の上で回るように踊りながら繰り返した。「なるよーにしかないよー」それは、なるようになりながら、なるようにすらならないことに、なることにすらならないことなのだったろう。わたしたちはいつしか反省できなくなっていたし、だつてずつと雨が降っていて、気分も参っていたのだから。それはうっかり足を滑らせて床に転げ落ちた。「ちよっと、だいじょうぶ?」「運動不足だね、それ」「えーうそー、運動くらいしかしてないはずんだけどなあ」教室の床にすりむいていた膝が痛々しかったので、あなたは机の中からガーゼと消毒液を取りだして、手際よくそれをガーゼにしみこませた。「しみるよ」じくじくと血のにじむ傷口に、ひんやりとした液体の染みだガーゼが当てられると、その繊維の先で血と傷口が混ざりながら気化して、さらに傷口がひんやりとして、それはまるで痛みのようなだった。「ひー」「わ、痛そー」「わかる、痛そう」「痛そうに消毒するから痛くなるんだよー」とそれが口をとがらせて言うと、あなたは意地悪してもう一度ガーゼを当てた。「心頭滅却すれば火もまた涼しってやつだねー」「センチー滅却だねー」「センチー滅却しちゃダメでしょ」「ね、今日センチー行かない?」わたしの提案に、わたしたちは互いにいいねいいねと同意しあって、さつそく荷物を鞆にまとめて、大急ぎで床を掃き掃除して、台や椅子をもとの位置に戻してから、教室の電気を消した。カーテンもしっかり閉めると、よけいに光が差し込まないので、教室は真っ暗に見えた。「あ、わすれものー」とそれがそのなかへ戻っていくとたちまち見えなくて、その輪郭やまたその痕跡までもがその暗さにつぶれていってしまふようで、わたしとあなたはつい呼んでしまった。「それー」「なにさー」輪郭が白くまたたくように、それはぬつと闇から顔を出した。真っ暗な教室はしんと静まり返っていて、ほとんど、具体的に言うなら、しん、と鳴り響くほどくらいの一瞬しか、時間はなかった。わたしたちはセンチーで身体を清めてから、布団にまた帰りに行くだろう、そこには一瞬などというものが一切ないという意味で、教室と同じような永遠、時間を、一瞬をときおり気だるげに、気まぐれに生み出すような永遠と、どこか似ていたように思う。でも教室の床は硬すぎたのだ、ちよっと転んだだけで血がにじんてしまうくらいに、でも布団で転んだところで血はにじまなかつただろう、むしろその流した、わたしたちの流すべき血を吸ってしまっていただろう。なるたけ布団を清潔に保つために、センチーにいくのだ、センチーで悪い血を洗い流して、傷口を清潔に保つのもまた、校則でうるさく

一番右で一番上の世界を始まりとするのが一般的なので、わたしたちはなるべく右で上のほうへ向かった。「右とか上じゃなくて、北とか東とか言いなよー」それに馬鹿にされるのは癪だけど、たしかに北東へ向かうべきだった。それはわたしたちのスケールの問題だ、それは教室がいくつかけるいくつだとか、塩原がいくつかけるいくつだとかいう問題じゃなくて、つまりわたしたちの体力とか運動の問題だった。わたしたちは塩原を抜けた、と書いてしまうには簡単だったけれど、そう書くたびにわたしたちは塩原の内側へと抜けて行ってしまう。塩原の外側に塩原があるのだから塩原の内側は塩原で、ひとすくいした塩だけが美しかった。わたしたちは塩の味を知るほどの身体をもっているし、わたしたちが流せる血に塩は必須だったのだから、塩を舐めることはひとつの延命というか、同じ味に返ってくるための、塩粒が世界として塩原に広がっていた。一番右で一番上のひと粒もきつと同じ味がするだろう、すでにそれは舐められてしまっただろうか、わたしたちはたがいに目を開いて舌をべえと出して、お互いにあかんべえをした。「うひゅーのかんうめ」「うひゅーう」「うひゅーえんいつ」ひゅうひゅうと音がすると思えば隙間風で、窓が開いたままだったので、あなたは立ち上がってそれを閉めに行った。「ねえ、これが一回目だと思う?」「なにが?」「窓を閉めたの」「うーん」窓はいままに何度も閉められたはずで、そしてそれと同じ数だけ開けられたのだろうけれど、「ううん、窓を開けてから、窓を開けることは可能だよー」と言って、世界の「開」と「閉」との数を数えはじめた。「もしこれが同じ数だったら、奇跡じゃな?」でも、いくつといくつとか、そういう問題じゃなくて、つまりわたしたちの体力とか運動の問題だった。「ねえ、これが一回目だと思う?」「なにが?」「何もかも……一回目があったのかなあ」

二回目の世界は一回目の世界の中にあるのだけど、逆に言えば、一回目の世界は零回目の世界の中にあるのだろう、わたしたちは数学は苦手だけれど数を数えるのは得意だった。一回目の世界の中に一回目の世界があるように見えるときもあるけれど、そうではなくてそれはそれで触れ合っているにすぎなくて、一回目の世界の中に二回目の世界とまた別の二回目の世界とがときたま触れ合うようなものだった。床に散らばったビー玉をはじくとそれぞれがぶつかって *testtest* と音がした。キン、コン、カン、コンと音が連打して、あつそれはキャノンボールだね、と玉撞きが好きなあなたが言った。教室の端っこがポケットだから、ビー玉をぶつけ合って、ポケットに入れるのを競い合った。「ね、ポケットに落ちた球ってどうなるのー?」「下の方で集まって、また並べられるのを待つんだ」へえとそれは感心して、使い捨てなのかと思ってた、と言うと、そんなワケないじゃん、とけらから笑った。わたしたちはケラケラ笑ったことのあったわたしたちで、「ねえ零回目の世界にいたとするじゃん」「うん、するする」「ていうか、言っちゃえば、いるよね」「そこから抜けるにはどうすればいいのかな?」「負の一回目の世界に行けばいいよ」「負の世界だね」「でも、そうして失敗したの」数列を遡ることではわたしたちのスケールの範疇なんだ、だから虚数がいいなと思った。でもこれは名づけだったから、名付けてしまおうと負の虚数が現れてしまって、問題は世界にいると世界を数えたくなくなって仕方なくなってしまうわたしたちの欲望だった。わたしたちは向かおうとしている。「え、どこに?」「黙ることは死と隣り合わせだったけれど、我慢できずに言葉を言えば塩にな

あくまでこれは脚本というかわたしが書き留めたもので、わたしはわたしのことをわたしと呼ぶのではなくてあなたとそれと同じようにわたしと呼ぶことにしていた。「なんとか書けるものだね」とこの二行を指してあなたが感心して、「あくまでこれは脚本というかわたしが書き留めたもので、わたしはわたしのことをわたしと呼ぶのではなくてあなたとそれと同じようにわたしと呼ぶことにしていた」と読み上げ直した。

「ねー、上演するときつてさ、地の文は誰が読むの?」「ええと、本当はト書きに直すんだよ」「とがき?」「こんな風にさ、

わたし、紙にペンを走らせて、ト書きを書いた。

わたし…こういう風にさ、科白と科白以外を分けて書くんだ

それ …え、でも普通に分かれてるじゃんー、鍵かっことでさ

わたし…こう、演者単位なんだよ

あなた…なにそれ、どういうことさ

わたし…その場面ごとにさ、誰がうごいて、誰がしゃべって、って行わけするの  
それ …紙もつたいなくないの?

あなた…改行するかどうかの違いじゃないの。間。わたしは少し答えあぐねて、少し屁理屈を言うように答えた。わたし…改行するとかしないとかは見やすさの違いでさ、それより大事なものは、こう…:…そのとき誰がそれを言ったかとか、誰が何をしたって、はっきりしておくことが大事でさ、だって脚本って世界以前でさ、世界譜なんだよね。それ…じやあさ、わたしとあなたとわたし役の人が、世界より少し前にいるのかな。あなた…ていうか改行しないとちよっと混乱するね、これ、鍵かっここに戻した方がいいよ」あなた、わたしの書いた脚本をまじまじと見つめながら、不思議そうに尋ねた。あなた…「ねえ、ここに書かれてるのは記録なの、再現なの、予言なの?」わたし…「うーん、事実なのかなあ」

それ…「誰が喋ってるかわかりやすいねー」わたし、いちいち科白に書きながら、答えた。わたし…「つまりこれはまだない世界を書いているのかもね。世界のまえに、過去とか未来とか今とかないよ」あなた…「でも、わたしたちがいるじゃない」それ…「ねー、さつきからなんか、すごい静かだ、この世界はすごい静かな気がするー、三人きりになっちゃった気がする、わたしはわたしはつきり見えるし、あなたも、わたしもはつきりいるような気がして、なんだか健康すぎる感じがして、前の時間が地理だった気がする、ね、これって戦いなんじゃない?」それ、振り返ってしまったので、塩になってしまった。あなた…「うわっ」わたし…「あちゃー、こんな古い手にひっかかっちゃって…:」わたしとあなた、とりあえず埋めようとした。わたし…「昔、ゲームで失敗するとか、たとえば失くしちゃいけないアイテム失くすとか、そういうことしちゃったときに、リセットしてもう一度始めたら、その中のキャラクターにすごく怒られてさ」あなた…「なにそれ」わたし…「そのキャラクターだけが、世界の改変というか、切断というか、こう、そうだなあ、あの真っ暗な瞬間に気づいててさ、でも、それを誰にも告げようとしないうし、戻す気もなくて、つまり、見過ごすぶんには、コストはあまりかからないんだ、たぶん」あなた…「コスト?」あ、

わたしたちは探されているとか求められている、でも少し退屈だから、しばしば界面の波紋に阻まれてしまうのだった。「自意識過剰なんだから」「仲間だと思ってるんだ」黒板の日直の文字は消されなくてもいつのまにかだんだんと薄まり、そのたびになぞりがきして確かにした。落ちた粉は塩粒のように地に落ちて、やがてこの教室も真っ白に埋まってしまったかもしれない。塩原が窓のそとにひろびろとひろがっていた。そのごく浅い湖面と空とはうつしあっていて、あいだに障害物が建ってはいなかった。塩原は無意識だったし、それに無意識のためにわたしたちは奉仕していたから、そうだ、塩原に奉仕していたのも否定できなかった。じっとみて融けていかれて、即ち塩原で、もっともっと上の方から見たら真四角で布団みたいに見えただろう。

「ねえ思ったんだけどさ、この塩原にたまった水を、真上から見たらどんなふうに見えるかな」「そりゃ、空が映ってるさ」「それと、見てるじぶんが映るでしょー」それはもはや空そのものだねとそれは言った。鏡に映っているのが自分かどうかなんて鏡が二つないとわからないし、実は同じように二つあってもわからなくて、鏡がすべて嘘をつかないかどうかを確かめる鏡なんてなかったのだから、鏡を見ることは判断停止で、そこにはただひたすらに限界があった。「たぶんこの塩原でさ、真ん丸の鏡で囲まれてるんだよ」「真ん丸の?」「そう、内側が鏡でさ、真ん丸の」丸い鏡に包まれたら、自分と自分の像が重なっただろう、それは幸せだったろう。「わたしたちの」、「わたしたちによる」、「わたしたちのための教室」そうだいつもこの教室は学園祭で、だからセンサーはこなかったのだ、学園祭だけは大目に見てくれた。でも学園祭がつづくかぎり、わたしたちは出し物のお化け屋敷のお化け役を交代交代でしなければならなくて、そうだ呼びかけてほしかった。「もーいいよ」「まあだだよ」「もーいいよ」「まあだだよ」シフトの交代の時にいつもそれはふざけるから、「ちよつと、どっちがお化けだかわからなくなっちゃうよ」もとから水子のわたしたちは生まれてないから死ねなかった。「二回目じゃ同定されるね」この角を曲がるとお化け、またこの角を曲がるとお化けで、わたしたちは二回目で初めてわたしたちになるのであって、つまりお化けから水子に生まれ直すのだ。それが順番が逆かもしれないけれど、だつてわたしたちに一回目はなくて、二回目の一回目もなくて、一回目の二回目も、それはやっぱり二回目なのだから、ともかく一がなくなってしまったのだ。「じゃあ、終わりは?」「終わりつて?」「無限遠?」「無滅塩?」ねえ、水子に生まれ直すのは変じゃないかな、だつて水子に生まれることは出来ないんだから、とわたしが言うのと、じゃあその水にも塩を足して塩水子にしよう、「しおみずこ?」「えんすいこ?」円錐の子、円錐の小さな像をそれは教材の棚から取りだしてきて、自分の目に尖った方を向けた。「あぶないよー!」「だいいよぶだいいよぶー」そのときたぶんそれは自分の目をつぶす気なんかなかっただろう、円錐に目をつぶされるなんてもうたくさんだったのだ、わたしたちはもう散々、その解決法は(そうだそれは戦いだつた)、スマートじゃないと思つてきた。どうせ暗闇なら、洞窟のほうがいいじゃないか、太陽の光が入らない洞窟のなかで、盗んできた火をつけるんだ、教室に火を持ちこんだら目から光が出るほど怒られた。やがてその火は空気を使い果たして、わたしたちは死んだだろう、この洞窟の、教室のなかで。学園祭は火に包まれて、その火柱はわたしたちにとってはやっぱり二回目で、今度

終わらせる頃合いというものはなくて、それは無意識が決めることだった。たとえば終わりが描かれても、それは終わりの終わりではないことを重々承知していたのであって、たまたま終わる回だったというくらいだった。終わらせなくて構わないというのはわたしたちの特別な美学だったから。

正午だった。のびやかに塩原に響くそれは空と湖面との距離を振幅にしたように、長い残響を、いや永遠の残響をもって響いた、ないし、響いていたのであった。それをわたしたちは沈黙と呼んでいて、畏怖した。正午はあまりに静かで、これから暮れていくことなど気に留めていないように、そうだこれがその時なのだたたえていた。名は命令形ではない命令であって、それは死を命令するものだった。夜のプールに溶けていくこと、わたしたちにとって夜のプールに溶けていくことはたしかにそれを遂行するひとつの手段だったのだけれど、それは何度も何度も繰り返されて、類型としてわたしたちは、類型そのものになってしまった。それを死と呼ぶなら呼べばいい。わたしたちが求めているのは夜の死なのか、昼の死なのか。夜のプールに溶けていくか、あるいはもうひとつの死にかたといえば、この教室を、この教室があったということ、この教室がありえたということ、すべての教室という表記や記録さえ、この教室がありえなかったということまで焼きつくことだった。かつて教室ありき、という前提へ報いることすらわたしたちの死を以ておこなった。白い灰としてわたしたちは、白い灰そのものになってしまった。昼と夜はたがいをつがいの踏み台として延べ来るもので、わたしたちは日が沈んだり、日が上がったりするたびに、「おはよう！」「おはよう！」と呼びかけあって、わたしとそれは挨拶をして、おたがいをみとめた。布団のうえにはいつも同じ天井が、同じ知らない天井が広がっていたのは、そうだ、昼も夜も最後の戦いを許さなかった。昼に勝つたらばさあ夜に、夜に勝つたらばさあ昼に、わたしたちは常夜の代わりとしてこの教室にとどまって、死のことを忘れてずっとおしゃべりをしていた。ここからは仮定の話で、それは脚本ゆえの嘘であって、思いつきであって、しかしこれは嘘のなかでつく嘘だからこそ、効果があるかもしれないとわたしは思っていた。繰り返すがそれは試論だ、試論としてしか効果のないだろう、着実ではそれはいけない、過去形でも現在形でも、ましてや未来形や条件形でもない、命令形だけで紡がなければいけない試論であって、結論ではなかった。「え、そうじゃないの？ 締めっばい言い方しちゃって」「湿っばーい」結論だとみなすのはあなたの勝手だし、決断だし、倫理だった。決断はひとつの狂気だったから、ここで倫理は狂気でなければいけなかった。「そんなの、汲みつくせばいいじゃない」とあなたは言ったかもしれないけれど、残念ながらそれはできない。これはたった一回だけのことだ。塩原は雨に沈んでいく、教室は雨に沈んでいく、わたしたちは窓を大きくひらいてその水のなかへと出ていって、どんどんと上を目指していく。正午の光はみなそこまで届いて、水は光そのものになる。たがいに溶けていくのも厭わないわたしたちは、たがいに呼び続ける。「あなた！」「わたし！」「それ！」「それ！」「わたし！」「わたし！」名は命令形ではない命令であって、それは死を命令するものだった。それでもわたしとあなたとそれは呼び続けた。その響きは歌になってこの塩水の海に響き続けるだろう。永遠の沈黙に響き続けるだろう。さあ、やめろ。やめろ、見るのをやめろ。戻ってくるな、二度と。さあ、ここでやめてくれ。